
エデンの苑

桶明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの苑

【Nコード】

N9068X

【作者名】

桶明日

【あらすじ】

彼女が僕の前から姿を消して一年——西暦は2197年になっていた。

区域Cの外にある世界の退廃は、益々留まることを知らず、いよいよ強く警鐘が鳴り響いていた。

注・自サイト&FC2でも連載中です。

序章 〈過去の残滓——NOKORIKASU〉

1

都会の蝉は鳴くのが遅い。

コンクリートの壁に、地面に、わんわんわんわんとその鳴き声が沁み入る午後のこと。

僕たちが歩く通りには、点々と人為的に木々が植えられていた。頭上を上げば、その緑が日光に透かされて光っている。

「あつっ……」

拭っても拭っても額に汗が滲む。眉を、睫毛を、通り越して目に入った雫が目にしみて、やけに痛んだ。

「暑いねー」

のんびりと、どこか間延びした口調で、隣を歩いていた女が言った。

その声でようやく存在を思い出し、僕はちらりと横を一瞥する。頭から背にかけて流れるのは、細くて柔らかい髪。今はその髪も、ぎらぎらした真夏の日差しを眩しく反射させている。更に、この夏の盛りにあっても日焼けしない白い頬が、それでも炎天下のためにほんのりと赤く色づいていた。

「暑いねー。氷流君、暑くない？」

彼女はひよい、と僕の顔を覗き込む。くるくるした瞳が、真っ直ぐにこちらを見つめていた。

僕は思わず目を逸らした。

「だから、さつきから暑いと言ってるだろ」

あれ、そうだった、とその女——白星苑華は笑う。しかしその笑顔もすぐに引っ込んだ。

「何でこんなに暑いんだろ……。テレの不調かな？」

「いや、ある程度暑くないと、季節感覚がなくなるだろ」

苑華の言っている『テレ』とは『Temperature Regulator』——即ち温度調節器のことだ。

僕たちの住む区域Cは、この国の中枢部と言っても過言でない所だった。故に、環境には恵まれていた。

区域Cでは、まず、中心に政治都市がある。説明するまでもないが、そこは国の政治を執り行うための場所だ。次に、それを囲むようにして、事業都市、産業都市があり、ようやく住民都市が広がる。そして、その住民都市を更に覆うようにして存在するのが——壁だ。壁と言っても、万里の長城のようなものを想像されては困る。壁とは比喻であって、実際にそれがそびえ立っているわけではない。軍事都市があるのである。区域Cは軍事都市によって、その外の区域と隔てられているのだ。

つまり、僕らの安心と富に満ちた生活は、大きな籠の中で送られているということだけ、分かってくれればそれでいい。

さて、前述したように、区域Cという籠の中は複数の重要都市があるわけで、そのために何不自由なことないように、人為的に環境を適宜調節していた。長い前置きになってしまったが、その一つが『テレ』というわけだ。

つまり、区域Cの中で、熱中症などの体調不良を起こす人間がないように、テレによっていつも適切な温度となるべく設定されているのである。もっとも、四季の変化がないと物足りない、ということで一応、それも考慮に入れてあるらしい。要するに、人間の欲は限界を知らない、ということだ。

他にも、区域Cの中には数多くの設備がある。台風や豪雨がくるのを防ぐために、事前に大規模な低気圧を察知したら、その気圧をコントロールし災害を和らげる、『プレ』。地盤プレートの詳細な動きや歪みを感じし、地震を予測する『地震予知機』——通称モリタ5。これはこの地震予知に世界で初めて成功した、日本人物理学者の名から取ったらしい。『5』というのは、予知機は開発されて

から何度も改良されており、現在、五世代目ということだ。

勿論、設備は自然災害対策だけに留まらない。木々や小さな花の一本、作られた自然に住まう動物達や虫の一匹に至るまで、細かくその数が計測されており、増えすぎず減りすぎないように、監視・制御されている。

また、人間が住まう街には至るところに、監視カメラがつけられ、犯罪を防止すべく働いている。更に空気が汚れないよう、漂う汚染物質を浄化し、浄化できない分は区域Cの外に吐き出す。

見えないもの——即ち情報に関して言及すれば、それには全てフィルターがかけられている。薬や武器など犯罪に繋がるもの、人の墮落を著しく誘うと判断された猥褻なもの、そして賭博に関するものに至るまで、垂れ流しできないようになっている。区域Cを流れる情報は、一度、情報部を経由して吟味された後に、許可されたもののものだ。それは決して、間違ったことではない。世の中に醜悪なものを蔓延させないための、必用な手段なのだ。

区域Cの中にある設備は、これら以外にもまだまだ存在しているが、ここで説明する必用はないので、省略しておく。

とにかくこれらの設備のお陰で、僕らの籠は、一点の染みもなく、汚いもの、穢れたもの、卑しいものが存在しない、清らかな世界として成り立っている。それは人間が人智を尽くして創造した、完璧な楽園だった。

突然、隣に人の気配がなくなったので、僕は立ち止まる。振り返ると、数歩後ろで、苑華^{そのか}が自販機相手に格闘しているところだった。僕は彼女の側まで歩み寄る。

「なにやってんの？」

「チップを受け付けてくれないの。おかしいな……」

苑華は機械から拒絶されたチップを引き抜くと、その端子に息を吹きかけた。そしてもう一度差し込む。すると、小さな台の上に立体映像が映し出された。

「げ、あと二百Mしかない」

苑華はぶつぶつ言いながら、ジュースのメニュー番号を入力する。浮かび上がった二百の表示が百八十まで下がった。

スライドしてきた棚の上に、オレンジジュースのカップが二つある。彼女はチップをチェーンに通して首から下げた後、カップを手にとった。

「はい、一つは大好きな氷流君^{ひりゅう}にプレゼントです」

そんな台詞を臆面もなく言いながら、僕の方にカップの一つを突き出す。僕はそれを受け取った。

「ん、ありがとう」

「そこに座ろ」

レトロな雰囲気漂わせる——しかし、妙に場に不釣り合いな——木製のベンチを、苑華は顎でしゃくった。

太陽の位置の関係で、丁度良く自販機が影を落としてくれている。涼しいと言い難かったが、それでもいくらかはマシになった。

頭が暇らしい通行人達が、僕らの方をちらちらと見ながら、通り過ぎていく。

一応、断っておくが、僕らは俗に言う『恋人同士』という馬鹿馬鹿しくも甘ったるい仲ではない。僕も苑華も大方、一般人とはズレ

た感覚の持ち主だったから、そんなものの必要性を感じなかったのだ。

わざわざ相手を束縛しあってどうする。そんな煩わしいものはまっぴらごめんだ。

「んね、氷流君」

不意に、苑華が話しかけてきた。僕は目だけを向ける。

「何？」

「私こと、白星苑華しらほしさんは、氷流君にご報告があります」

彼女はそう言つと、ひらりとベンチから立ち上がった。彼女の右半身だけが、日に照らされて眩い輪郭を描いている。

「私ね、ここを離れてずっと遠くに行くの。区域Cの外に出るんだよ。お養父うとさんのところに行くの」

「はあ？」

あまりにも突飛すぎる話について行けず、僕は一瞬、思考が止まった。

苑華に実の両親はいない。そのため暫くは施設で育ったが、十歳の時に今の養父に引き取られたと聞いている。だが、その養父とも現在は離れて暮らしており、彼女は長いこと一人暮らしの状態だった。

「お養父さんって……今更」

僕が絶句していると、苑華は説明した。

「実は私を引き取ってくれたお養父さんは、は情報社の大手——エデンカンパニーの神谷紫苑社長かむやしおんなんです。凄いでしょう？」

僕はまた驚く。

その名前は聞いたことがあった。無名の情報社を、僅か二年足らずで大手に成長させた強者だ。年齢は四十過ぎといったところだっただろうが、それなりに社会の情勢に興味を持つ人間なら、誰でも知っている有名人だ。

情報社というのは、文字通り情報を商品として販売する会社である。売られる情報には、新聞、雑誌、書籍、音楽、画像、果ては研

究論文まである。エデンカンパニーの場合は、確かその中でも、研究に関する情報が主な商品だったはずだ。

情報社が世間に認められて、会社として成り立つのは簡単なことではない。区域Cでは検閲があるから、発信する情報には制限が設けられている。有害なものはないこと、かつ、国民にとって有益なものを発すること、というそれらの条件をクリアした会社だけが、公に認められてJDSの称号を取ることができる。ここで初めて、一般に流通する情報を販売することができる、というわけだ。

数年前まで、主な情報社は二つしかなかった。厳しい制度のため、誰かが新しく情報社を立ち上げようとしても、政府の認可が降りず会社として成りたつ前に立ち消えになったり、或いはそのJDSの称号を得るために、莫大な投資をして体制を整えようとした挙げ句、会社を運営していくための資金が底を尽き、結局潰れてしまったり、他の二社の情報社に敵わず倒産したりするのがオチだったのだ。ところが、エデンカンパニーはそこに台頭してきたのである。最初は誰しもが、また潰れてしまうだろうと思っていたが、エデンカンパニーは持ちこたえた。それどころか、それまであった二つの情報社を凌ぐ勢いで成長していったのだ。それは偏に、社長である神谷紫苑の手腕によると言われている。

もつとも、一定の分野の中で、神谷^{かむや}の知名度が高いのは、それだけが理由ではない。神谷は区域Cの外の人間なのだ。大会社の社長でありながら、Cに住むことのない、いわば変人だった。彼曰く、事業が密集するCの中で開発を進めれば、企業秘密を盗まれてしまう、とか。それが転じて、一部の人間の間で、公にはできない研究を取り扱っているのだ、いや或いは裏で政府と繋がっていて重大な国家研究に取り組んでいるのだ、とまことしやかに囁かれていた。とにかく、そんなテレビや新聞でしかお目にかかれないような有名な人に、苑華^{そのか}が引き取られていたなんて、驚嘆すべきこと以外のなんでもなかった。

「何で今まで黙ってたわけ？ てか、それマジなの？」

苑華は大真面目な顔でこっくり頷いた。その拍子に、長い髪がさらさら揺れる。

「マジだよ。私、氷流君^{ひりゅう}には嘔吐かないもん」

僕はどう返事をしているのか分からず、唾を飲み込む。その音がやけに耳に響いた。

彼女の瞳は真摯そのもので、とても嘔吐を吐いているようには見えなかった。ただ、全てを語っているわけではないようにも思えた。

「だから、氷流君のことは好きだけど、あと一ヶ月でお別れです」
「なに？ お前、俺のことが好きなのに、どっか行くの？」

意地悪く言ってみる。苑華はその軽口に反応する様子もなく、ごく普通に答えた。

「今すぐって、わけじゃないけどね。私、お養父さんのところで、幸せに暮らすんだよ。羨ましいでしょう？」

彼女はにこにこしていた。僕は馬鹿だから、そのにこにこしている顔を見て、ごく素直にこいつは幸せなんだと思った。だから僕もにこにこした。

「いや別に、勝手にしてくれって感じ」

「何それ、冷たい！」

苑華は声を上げてまた笑った。

頭上で木々がざわめきを起す。吹いてきた風は熱気を帯びていて、あまり気持ちの良いものではなかった。

「お別れの記念に、一ついいことを教えてあげましょう。私はもう一つ名前を持っていて、昔、『エデン』と呼ばれていました。楽園って意味なの。言わなくても知ってると思うけど」

それは初耳だったが、僕にとって特に興味を引くような話ではなかった。適当に受け流していた。また、こいつの下手な冗談か、事実を脚色した小話だろうとしか思っていなかったのだ。

「何はともあれ、白星^{しらほし}さんは氷流君とはお別れです。寂しいでしょう？」

「いや別に」

反射的に即答してしまう。苑華は今度は笑わなかった。

「やっぱり冷たいね……」

蝉のじりじりいう鳴き声は、ますます辺りをうるさく満たし、日差しはいよいよ強く照りつけていた。

それから一月後、苑華は本当にいなくなった。

いなくなつて初めて、実は自分が彼女に惹かれていたことに気付いた僕だったが、もはやどうしようもなかった。

しかしその想いも次第に薄れていくようになり、彼女のことを思い出す回数は減っていったのだ。僕みたいな奇人に、どういうわけか、犬みたいにつきまといていた変わった女がいたなど、ただその程度だった。

そう、その程度のはずだったのに……。

彼女が僕の前から姿を消して一年——西暦は2197年になっていた。

区域Cの外にある世界の退廃は、益々留まることを知らず、いよ

いよ強く警鐘が鳴り響いていた。

蒸し暑さの中に、とろとろと入り込んでくる夢。こういつときの夢は、あまり気持ちのいいものではない。

起きなくてはいけない、起きた方がいい、というのは頭の片隅では分かっている。分かっているのだけれど、鉛のように重くなった体はいうことを聞いてはくれず、僕はそのままずると眠りの中に引きずり込まれていく。

明るい青い生地に、原色の赤をした金魚が泳いでいた。

また、あいつの夢だ。

どこかで現実にいる僕は、軽い嫌悪を覚えてしまう。この先の展開が見えてしまったために。

青い生地には、左右からくる橙の灯りで照らされている。それを一部削り取るようにして、影ができてるのは、僕が灯りを遮っているからだ。

目の前には、青い浴衣を身に纏った女が歩いていて。

からん、と下駄の音が響く。気が付けば、女の口ずさむ鼻歌が聞こえるほどに、夢の実体が迫ってきていた。

——ずっと、楽しみにしてたんだよ

女は振り返る。屋台の灯りの中で、満面の笑みが輝いていた。

——『ずっと』って……今日、いきなり呼び出したんじゃねえか
彼女は後ろ向きに歩きながら、甘い邪気のある笑みを浮かべた。

——でも、白星^{しほいし}さんには分かってたよ、氷流^{ひゅう}君は絶対来てくれる
ってこと

僕は軽く目を見開いて、まるで知らない人間であるかのように、苑華を見つめた。

苑華は再び、くるりと背を向ける。そして、浴衣の袖を蝶のようにひらひら振った。

少し昔の浴衣は、もう少し袖が短いものだったらしい。また、今

のように重ね着をして、配色を楽しむこともなかったようだ。どうでもいい話ではあるが。

いくら夏とはいえ、夜はもう少し涼しいものだと思っていた。しかし、今はごみごみとした人の中で、噓せ返るように暑い。周囲を埋め尽くすざわめきが、耳に鬱陶しかった。

もともと、人口密度の高い場所は苦手だ。すぐ飽きる。気分が悪くなる。

その時、不意に苑華が、ごく自然に僕の手首を掴んだ。

——かき氷を買いましょう。でも、氷流君はいつもぼーっとして
いるので、白星さんは心配です。はぐれないようにしないと

少し遠慮がちに、優しく苑華の指が、僕の手首を締め付ける。僕は
されるがままになっていた。

——いつも、ぼーっとしてるのはそっち。いつも、突然いなくなる
のもそっち

聞いているのかいないのか、苑華はずんずんと人の合間を縫って、
屋台の列に辿り着く。待たされること十数分。僕らの手には、夏色
のかき氷があった。

——思ってたより時間、取られちゃったね

行儀悪く匙の先を噛みながら、苑華が文句を言った刹那のこと。
細く高い音が上がった。続いて、夜空に花火が現れる。無数に広がる
光の粒が消えた後、低く重い音が場内に響き渡った。

人々の間から、感嘆の混じった歓声が沸き起こる。僕も思わず、
頭上で繰り広げられる祭に、見入っていた。

——花火はね、綺麗だけど、見てると少し切なくなるね

突然、苑華が口を開いた。

——何で？

——すぐに消えちゃうから

——でも、すぐにまた次の上がるだろ？

——だから、尚更だよ。……でも、やっぱり綺麗だな。やっぱり、
好きだな

苑華は、早くも溶けかかったかき氷の山を突いた。

僕は気付かれないように、横目でそっと彼女の横顔を盗み見る。つん、と軽く上を向いた顎。小さい顔は、花火がうち上がるたびに、様々な色に照らされていた。

細い茶色の髪。色素の薄い瞳孔。色白の肌。

どれをとっても、それは儚い印象を抱かせるのに充分で――。

昔から、彼女はすぐ近くにいても、限りなく淡い存在のような気がしていた。それは何も、外見から受けるイメージだけではない。彼女の内面から滲み出る、掻き消すことのできないどうしようもない――消滅の匂い。

今だから分かる感傷だと、笑われても構わない。だが、それはある種の予感だったのだと、どこかで現実にいる僕は思う。

花火はまだ続いていた。

透明な闇に浮かび上がる色鮮やかな光が、眩い軌跡を描く残像となつて、瞼の裏に残った。

――また、来れたらいいな

僕に言ったのか、それとも単なる独り言なのか、苑華は呟いた……。

「もしもし？ ちょっと失礼してもいいかな？」

不意に、低い女の声が耳に飛び込んでくる。今までいた世界が一気に遠退き、僕ははっと身を起こした。

「は、はい？」

腰掛けていた木製のベンチが軋む。

まだまだ日差しが柔らかい、初夏の公園。学校帰りに、少しの休憩のつもりで寄ったのだが、いつの間にか眠りこけていたらしい。口の端から顎を伝う生暖かい感触に気が付き、さりげなく手の甲で拭う。次いで目に飛び込んできたのは、長身の女だった。

やや吊り上がった、切れ長の目。優美な曲線を描く眉。滑らかな頬に映える、紅い唇。無造作に一つに纏められた、見事な黒髪。

文句なしの迫力美人である。少なくとも、僕好みの。

ただ、心を許すことをよしとしなかったのは、その目だ。

彼女の黒目がちの双眸は、ぞっとするほど澄み、見ているだけでふと吸い込まれそうになる。けれどもその奥には、凶暴な色が潜められていた。一度縛したものは決して離さない、逃げることをよしとしない、強烈な光。まるで肉食獣のような。

妙な女だ、と、そう直観してしまった。

確たる根拠があつたわけではない。でも彼女の持つ感覚質は彼女独特のもので、その雰囲気^{クオリア}を何かに例えることができなかったのだ。

それは僕が今まで見たことのない種の人間だった。

「もしかして、起こしてしまったかな？ それは悪いことをしたね」

女はくつと喉を鳴らす。バツが悪く、僕は視線だけを下に落とした。

「いえ、別に構いませんけど」

「そうか？ では遠慮なく……。この辺に碧水学園へきすいというのがあ
ると聞いたのだが、もしよければ、案内しては頂けないかな」

丁寧な言葉遣いではあったが、その口調はどこか横柄さを孕ん
でいた。小首を傾げているが、長い手足の彼女に、その仕草はひど
く似付かわしくない。

碧水学園を知らないはずがない。何を隠そう、そこは僕が通う
学園なのだ。

「ああ碧水への行き方なら……」

言いかけて、僕は口を噤んだ。女から漂ってくる、危険な匂い
に気が付いたからだ。

鼻孔を乾燥させるような、喉の奥に痛みを与えるような、その香何の匂いだろう、と一瞬考え、答えに辿り着く。吸うだけで噎せそうになる、実に不快なこの異臭は、火薬だ。

自分で——しかも突然——言うのもなんだが、僕は頭がいい。見栄でも誇張でもなく。下手な謙遜は、他人にとって余計嫌味だから、そんなものはしない。

もう一度言う、僕ははつきり言って、頭がいい。

だから、その火薬の匂いだけで、——たとえ、覚醒したばかりのため、脳みそに霧がかかっていたとしても——頭の回転のスイッチが入る。

そうだ、よく考えればおかしいではないか。普通の人間であれば、小型のマップを常備しているはずである。それはハンカチやティッシュと同じぐらいに、常に持っているはず物なのだ。

小型マップを持っていない者。それはよっぽど、外に出ることに慣れていなくて準備の悪い人間。……或いは、マップを手に入れない種の間人。

女が前者の場合——もっとも、見た目からして、その線はなさそうではあったが——そんなだらしない奴に、僕がわざわざ道のりを教えてやる筋合いなどない。これは、僕が寝起きで苛立っていたからではなく、ましてや、僕の性格が悪いからでもない。当然のことである。

質^{たち}が悪いのは、後者の場合。マップを手に入れられない者——それは区域Cの外の人間だ。

区域Cが保護された世界なら、Cの外は保護されていない無法地帯の世界。犯罪が横行し、貧しい人間が最低限の生活を強いられる世界。そこから来た人間が、まともな者であるはずがない。

そこまでの一連の思考を、一瞬の間に為し、僕は言いかけた言葉

を喉の奥に飲み込んだ。

「知りませんね」

女は片眉をあげた。

「そうか。では仕方がないな。時間を取らせて悪かった。ゆっくり、日向ぼつこの続きでもしてくれたまえ」

偉そうにそう宣^{のたま}うと、女はくるりと踵^{きびす}を返して、公園を出ていく。僕は暫くその後ろ姿を見送ったが、思いついてそつと彼女の後をつけてみることにした。

だが、いくつめかの曲がり角で、その端麗な姿を見失ってしまう。僕は落胆と安堵の混じり合った奇妙な気持ちの中で、一つ大きな溜息を吐いた。

しかし、である。

「ふむ。どうやら碧水^{へきすい}の生徒は、他人を尾行することを教えているらしいな」

その芯の通った声は、僕の背後からかけられたものだった。心臓が口から飛び出そうになり、僕は反射的に飛び退く。振り向いた先には先ほどの女が、愉快そうに瞳を踊らせていた。

「え、あ、いや……」

「それとも、その学園バッジは偽物かな？ 碧水の生徒は、優秀だと話に伺っていたのだが、どうやら君は必要以上に、頭が悪いらしい」

「ああ？」

何だこの女は、喧嘩売っているのか。

露骨に眉根に皺を寄せてみせたものの、女は一向に怯む様子を見せない。

「あんた、一体……」

なんなんだよ、とそう言いかけたが、それは途中で遮られる。

「琳^{りん}。野々瀬琳^{のせりん}だ。……君が教えたくないのなら、自分で探すまで。機会があったらまた会おう、縄田氷流君」

野々瀬と名乗ったその女は、背を向けたまま手を振り、その場

を去っていった。

立ちつくしていた僕は、侮辱による怒りのため、フルネームで呼ばれたことに暫く気が付かなかった。

アスファルトに響く自分の足音を聞きながら、僕は悶々と考え込んでいた。何を？ 決まっている、先ほどの女——野々瀬^{のせ}のことだ。

何故あの女は僕の名前を知っていたのだろう？ 最初から僕が碧水^{へきすい}の生徒だと知っていて、それで近付いたのか？ そうとしか考えられない。けれども僕は区域Cの外に知り合いなどいない。そもそも区域Cを出たことは一度しかない。その一度というのも三、四歳頃のことで僕自身の記憶には殆ど残っていないのだ。

幼い頃、僕は心臓に障害を持っていたらしい。それで区域Cの外にある病院で手術を受けたのだ。勿論、設備の整った優秀な病院は区域Cの中に多くある。しかし、その僕が治療を受けた病院は、区域Cではできるだけ公表したくないワケありの、新しい術式を開拓していたそうだ。そして僕はその最新式の手術を受けることになったのだ。こういうことは格段、珍しいことではない。企業秘密を守るために区域Cの外に支社を持っている会社——病院は会社ではないが、競争という点では似たようなものだ——は少なくない。もっとも、区域Cに本社すら置かないという、奇妙なことこの上ない会社もある。それがエデンカンパニーだ。だが、それは例外中の例外である。

とにかく、僕が区域Cの外に出たのは一度きりだ。もしかしたら、あの女はその時に病院に勤めていたスタッフだろうか。そう考えて、すぐに否定する。どう見てもあの女の年齢は二十代前半だった。十数年昔に、医療スタッフとして働いているわけがない。仮に野々瀬がかなり若作りをしているとしても、当時三つか四つだった子供の顔を、今の僕と一致させられるわけがない。けれど、そうすると完全に行き詰ってしまう。あれは誰だ？

第一、碧水学園に何の用事があるというのだ。

不意に目の前に丸いボールが転々と転がってくる。その赤い体

を陽光に反射させて、それは僕の足許で止まった。拾い上げると、日差しで暖められた表面がほんのりと、手に心地よかった。

「あ、お兄ちゃん、お帰り！」

幼い、高く澄んだ声が耳を打つ。僕は振り返った。

「さくら」

むつちりした滑らかな白い肌をした五、六歳ぐらいの少女が、僕の方に駆け寄ってくる。純粹な笑顔を惜しみなく向けるこいつは……妹だ。釣り目がちの僕に似ておらず、目尻の下がった愛らしい顔をしている。悔しいが、可愛い。兄馬鹿と言われても構わない、とにかくこいつは可愛い。

「ただいま……ほらよ」

僕は拾ったボールをさくらに渡した。

「ありがとう。さくらも一緒にお家帰る」

さくらは僕の隣に立つ。その様子が、本当にいじらしかった。やや傾き始めた日差しが、道に大小二つの影を作る。さくらはその影を見ながら飛び跳ねている。どうやら自分の影の頭を踏みたらしい。

——できるか、そんなこと

けれども彼女はその無駄な努力を実に楽しそうにやっていた。跳ねるさくらと、そのやや後ろを追うようにして歩いていた僕は、ほどなくして家に帰り着いた。そして僕は、玄関先にある指の先ほどの四角い窓に、自らの目をあてた。すると、僕の虹彩を認識した機器が、ピツと電子音をさせて、ドアの鍵を外す。

「ただいま」

玄関に入った僕は、しかしそこで嘆息する羽目になった。

靴置き場には、爪先の細い黒光りするミュールが置かれていたのだ。馬鹿馬鹿しいぐらいに踵の高い作りのそれを、好んでよく履いている女を僕は一人知っていた。

「お帰り、氷流^{ひりゅう}。音西^{ねとり}ちゃんが来てるわよ」

母親が奥の部屋から予想通りの台詞を飛ばしてきて、どっと疲

劣が滲み出る。ところが隣にいるさくらは、ぱつと目を輝かせて喜んだ。さくらはどういうわけか、その存在だけで僕を一気に疲れさせた張本人に、よく懐いているのだ。僕からしてみれば、こうやって何の連絡もなしに突然訪問してくることといい、迷惑かつ面倒この上ない女なのであるが。

さくらは二階にある僕の自室に向かって、階段を駆け上がる。対して僕の足は、まるで枷を嵌められているかのように動かし辛くなった。一步一步進むたびに、ずしりと心の錘が増えていく。

部屋の自動スライド式の扉を開けると、果たしてそこには、やはりというべきか、一人の女が鼻歌を歌いながら、僕のベッドに寝ころんで漫画を読んでいた。腰まで届く栗色の髪は、二つに結ばれている。彼女は僕の姿を視認すると、片手を挙げた。

「氷流、おつかえりー！」

「そこ、俺のベッド。そしてそれは俺の漫画。降りて、返してくれない？」

「いいじゃん、ケチ。それにあたしは、氷流のお嫁さんになるんだもん！ 氷流のベッドはあたしのものだし、氷流の漫画もあたしのものよ」

「勝手に決めるな。退^どけ、帰れ」

凄^{すく}んでみせると、音西は肩を竦めて、ベッドから降りる。

この迷惑極まりない女の名前は佐藤音酉さとう ねとり。僕のクラスメイトだ。
苑華そのかがいなくなった辺りから、猛烈にアタックしてくるようになった。最初はそれほど悪い気もなかったが、そのあまりのしつこさにはつきり言つて、鬱陶しく感じるようになった。けれどもそれにも構わず、音酉のアピールは増していき、ついには彼女宣言までするようになったのだ。面倒臭くて放置していた僕は、気が付いたらがつちりと外堀を固められ、いつの間にか僕と音酉は交際しているということが公然の事実として知れ渡ってしまうことになった。慌てて否定して、周囲の誤解を解こうとした時は既に遅し。単に僕が照れているだけだと、受け止められるのみだったのである。かくして、僕は音酉の計略にまんまと嵌ったというわけだ。自分自身が情けない。

いつの日か、彼女が『恋愛ごっこ』に飽きてくれることを密かに期待しているわけだが、それは当分の間無理そうだった。

「えー、音酉姉ちゃん折角遊びに来てくれたのに、帰っちゃ嫌だよ」

弱々しい服の抵抗を感じて視線を落とすと、さくらが裾を引っ張っていた。その濁りのない黒目に、不服の色が浮かんでいる。こんなふうには妹の純然たる非難の眼差しを浴びると、僕はどうしていいのか分からなくなる。途端に自分がとても悪いことをしているような気になる。卑怯だ。

「んー、さくらちゃんがそこまで言うのなら、あたしまだ帰らない！」

僕はもう少しで舌打ちをするとところだった。それをしなかったのは、さくらがはいだ声をあげたからだ。

「本当？ やったあ！」

「うんうん、お姉ちゃん、さくらちゃんのためにずっとここにい

てあげる」

僕のためにはとつと帰って欲しいのだが。

そのとき静かな振動音がして、扉が開いた。カタカタと音を立てながら入ってきたのは小型の青いロボットだ。半球状の頭には顔のパーツこそないが、周囲を認識するためのカメラが一つついている。頭の下に首はなく、円柱状の胴体がつき、その下にはローラーの脚がついていた。正式名称G―？型給仕機。一家に一台はあるお手伝い用ロボットだ。因みに、我が家では『Gさん――爺さん』の愛称で呼ばれている。実際、盆にお茶と菓子載せて家の中をカタカタと歩いている姿は――勿論、本人が自主的に持っているのではなく、運ばされているだけなのであるが――、まさに爺さんの呼び名が相応しい。そして今も、小さな丸い手で盆を支え、三人分のお茶と菓子を用意していた。

「今日ノ オヤツハ 甘野屋ノ 葛餅デス」

爺さんが辿々しい語調で説明する。この渋いセレクトは間違いなく母さんだ。

僕が盆を受け取ると、爺さんの両腕が胴体の中に引っ込んだ。

「わあ、嬉しい、甘野屋の和菓子好きよ！　じーちゃん、ありがとう」

音西が両手で爺さんの頭部を挟んで、その天辺に唇を軽くあてた。

当然、爺さんは顔を赤らめることもなく回れ右をして、無機質な音を立てながら帰っていく。どこことなく愛嬌のあるその後姿を見送っていると、音西に声をかけられた。

「なーに、あたしがじーちゃんにキスしたから妬いてんのぉ？」

「んなわけねーだろ、馬鹿」

「もう、凶星なくせに！」

冷たくあしらったにも関わらず、音西は興奮して僕の背部を力任せに叩いた。僕は危うく、盆を取り落としそうになる。すんでのところで堪えたが、茶は僅かに零れて盆の上で湯気の立つ水溜りを

作った。

僕は音酉を睨んだが、彼女は全く応えた様子もなく、さっさと自分の分のお茶と皿を取り、皿の上に乗った葛餅を一つ口に放り込んだ。

普通、他人の幸せそうな顔は見ていてこっちも幸せになるものだが、こいつの場合は殺意を覚える。そしてそれは僕だけの責任ではないはずだ。

「で、何しにきたの？」

盆を机に置きざま、不機嫌も露わに尋ねると、音酉は僕の方を一瞥した。

「実はね、一大ニュース持ってきたのー。それで氷流ひゅうりゅうに教えてあげようと思って！」

ふうん、と無関心な返事をしたのは、音酉の持ってくる『一大ニュース』というのが、大抵は下らないことばかりだからだ。例えば、野良猫がいなくなったと心配していたら鈴木さんが引き取っていただとか、近所のスーパーのイケメン店員が実は友達の兄だったとか、等。せめて、近所の野良イケメンが鈴木さんに引き取られたとかだったらまだ面白いが、流石にそれはないだろう。

自分の鞆を引き寄せてデンプー——電子ペーパーのことだ——を取り出した音酉を尻目に見ながら、僕は葛餅を口に含んだ。じんわりとした甘味が口腔に染み渡るように広がり、同時に冷たさが上顎と舌を圧迫する。美味也、美味也。これならば、甘いものが苦手な人でも病みつきになることを保証できる。

「あつたあー！」

二つ目を口にした直後に、突然、音酉^{ねと}が素っ頓狂な声を上げる。丸くて艶やかな葛餅は、その形態を留めたまま、僕の喉を通過して胃袋に落ちたようだった。当然、味わう暇などありはしない。

「ここだよ、この記事！」

僕の悔しさを余所に、該当箇所を見つけたのを喜びながら、音酉はデンペを広げてみせる。

……やはりこいつの嬉しい顔は、頭にくる。

「胃の粘膜に味蓄はないんだけど」

「は？」

「何でもない。で、一大ニュースがどうしたって？」

今度は野良犬と木下さんの話ではないだろうな。もしそうだったら一発殴ってやる。女だろうと関係あるか。食べ物で粗末にする方が悪いのだ。

一方、音酉は人の気も知らず、デンペに細い指を滑らせていた。それに従って画面が動く。やがて目的の記事がデンペの中央にいきついたらしく、指を止めると、今度は強く押した。すると小さな文字がはつきりと拡大される。

「ここ、ここ読んで！」

そういつて、彼女が指し示した記事は、新聞とはまた違う、けれど雑誌と言うには些か地味なものだった。目を眇めて、そしてその生地の際に記されてある印字を見て、僕は驚く。

「お前、これどこで手に入れてきたんだよ」

小さな書体でそれは『エデンカンパニー』と記されていた。恐らく、これは社内誌だ。エデンカンパニーの社員でもなければ関係者でもない音酉が、手に入れられるものではない。

「うふふふふー、あたしの情報網を甘く見て貰っちゃ、困るのよ

ん。……それより、読んでつたら！」

音酉は急かす。

まあ、社内誌とはいえ全く外部に流出しないものでもあるまい。そう思い直すことにして、彼女が指定した箇所を、声に出して機械的に読み上げた。

「神谷紫苑社長かむやしおんご令嬢——苑華さんそのか、十五日急性心筋梗塞のため死去」

一瞬の間があつた。その文字の羅列が、理解として胸に刻まれるのに時間がかかったのだ。そしてその一瞬が過ぎ去った後、僕は思わず声を上げていた。

「ええっ？」

不覚にも声が裏返つてしまふ。視界を上滑りしていく文字に、頭が追いつかず、僕は何度もその箇所を読み返した。

「苑華、死んじやったんだってえ！」

人の死をまるでゴシップネタであるかのように、音酉は跳ねるような口調で言う。そこには、逝去した魂への惜しみの念や、悲しみの感情といったものは微塵も感じられなかった。

音酉にとつて、これは話のネタの一つにしか過ぎないのだ。

僕は隣から聞こえてくる、不快な軽やかさを奏でる声を、できるだけ耳に入れないようにしながらもう一度記事を読み返す。そして最後の一文まで目を通したとき、ようやく安堵の息を漏らすことができた。

「ここ、よく見てみる。やっぱりこの人はあの苑華じゃねえ」

わざとぞんざいに吐き捨てて、デンプを音酉に突き返す。だが、渡したその手がまだ小刻みに震えているのを止められなかった。そして音酉にそれを見られたことが、耐え難いほど屈辱だった。同時にそういう状況を作った彼女に、激しい憤りを感じてしまう。

音酉は戻ってきたデンプに顔を近づけて口を開いた。

「……享年、二十五歳。あるえ？」

多くの男を惹きつけるであろう、その滑舌の悪い口調と幼児性のある高めの声も、僕にとっては、癪に障るもの以外のなんでもない。

「年齢が違っだろうが、年齢が」

「え、でも苑華、神谷社長の養子になるって言ってたじゃん」

「あれはあいつの嘘、冗句。分かった？」

そうなのである。

苑華が引越していつてから、僕はそれとなく彼女の友人達に近況を聞いてみたのだが、神谷社長の所に行ったという話は聞かなかった。彼らは皆一様に、新しい学校で元気にやっているらしい、と答えたのみだった。中には苑華からきたメールを見せようとしてくれた奴もいたが、女特有のカラフルな彩りを施されたそれを読む気など到底なれず、結局、目を通さず仕舞いだ。

よくよく考えてみれば、確かにあの苑華と神谷社長との間にどんな接点があるというのだ。苑華はどちらかといえば、平凡な、これといって何の特徴もない女で、神谷社長のような有名人と繋がりがあらずな華もなかった。

要するに、苑華は——どこで仕入れてきた情報なのか知らないが——神谷社長の娘が自分と同じ名前であることに気づき、最後の大法螺を吹いていったわけだ。

単にこちらを驚かせて楽しんでいたのか、それとも僕が彼女の転校に関してあまりにも無関心だったために気を引こうとしたのか、その真意がどこにあったのかは定かではない。

ただ、苑華が僕の前から去っていったという事実だけが残されている。

「なあんだ、折角、大ニユースと思って氷流をびっくりさせてやろうと思ったのにい」

音酉ねとりはデンペを片手でひらひらとそよがせる。

その軽薄な態度に、むっとするものが沸き上がるのを禁じ得ない。

「お前さ、誰かが死んだとかいう話を、そう簡単に持ってくるって人としてどうなんだよ？　そしてそれ聞いて俺が喜ぶと思った？　剣呑な口調で迫ってみたが、音酉は少しも応えた様子がない。両腕で自分の顔を庇うようにし、おどけたように笑っただけだった。

「やあだ、氷流ひりゅうこわあい！　ごめんってばあ」

全然悪いと思っていないであろう謝罪だった。

ここまでくると怒りより脱力が先に立つ。こんな奴に本気で怒っても仕方がない。エネルギーの無駄というものだ。

こみ上げてくる嫌悪を無理矢理、押さえつけて、僕は音酉から目を背ける。だが、一向に離れてくれない視線を感じて、つい、また振り返ってしまった。

「……何だよ」

怒りも露わに睨み付けてやったが、音酉は全く応えた様子もない。ただ、好奇心丸出しの瞳でこちらを眺めていただけだった。

「ふうん」

彼女は、くすりと笑う。

更に苛立ちが増した。

「何が『ふうん』だよ。お前、自分がやってること分かってんのか？」

「あたしは分かってるつもりよ。氷流が苑華そのかのこと好きだってことも」

本気で、殴ってやろうかと思った。いや、実際そうしていたか

もしれない、そこに柔らかな声さえ飛び込んでこなければ。

「ねーね、お兄ちゃん、絵本読んで」

ふんわりとした緩やかさで、嫌な場の空気を和ませてくれたのは、さくらだった。さくらはぶつくりと膨らんだ手に、小さなチップを乗せて僕の前に差し出していた。

その無垢な仕草を見て、眉間の緊張が解かれていくのが自分でも分かる。

普通、弟や妹ができたとき、兄や姉というものは、家族の関心を全て掻つ攫ってしまう彼らに対して嫉妬してしまうものだが、僕の場合はそれは当て嵌まらない。その不用意に抱けば壊れそうな華奢な体と、よく透る澄んだ声、そしてまだこの世界の穢れに染まっていない魂が愛おしくて、親にも顔負けの勢いで可愛がったものだ。

「はいよ」

僕はその紅葉もみじのような手からチップを受け取り、自分専用のデンプを取り出す。そして小指の爪の先ほどの端末にそれを差し込んだ。デンプの画面が一瞬にして変わり、淡い色彩の絵本の世界が広がる。

「つーまーんなあい」

音西が口を尖らせる。彼女はすつくと立ち上がった。

「もういい、折角、来たのに氷流が取り合ってくれないから……」
僕が内心ガツポーズをしたのは言うまでもない。はつきり言うてこの空気の読めない女にはとっとと帰って欲しかった。

しかし、僕は次の音西の台詞を聞いて、絶望に陥ることになる。

「トイレに行ってくる」

覗いちや嫌よー、と軽口を叩きながら階下へ降りていく音西に、僕は思わず舌打ちをした。

けれど、怯えた表情で僕を見上げてくるさくらに気づき、慌てて笑顔を作る。そしてデンプに映し出された文字を読もうとして……
…そこで硬直してしまった。

突然、視界がぶれたのである。

同時に、外部から体を拘束する物凄い圧力を感じる。いや、外部ではない内部からくるものなのかもしれない。直接、神経が痛みを訴えるのではない、何か触覚を感じるのではない。ただ身体がまるで自分のものではないように重くなったのだ。麻痺をする、というのはこういう感覚のことをいうのかもしれない。

疲れが溜まっていたとき、うっかり転寝した際に襲ってきたことのある金縛りを思い出す。自分の四肢どころか声帯すら動かすことができず、誰かに助けを求めることもできないあの恐怖。

今のこの感じはそれと似ていた。

そして、僕に訪れた異変はそれだけではなかったのだ。

——逃げなさい

聞き覚えのない少女の声が、脳内に滑り込んでくる。耳から入ってきたのではない、脳裏に直接響いたのだ。まだ幼さの残る、けれど繊細な輝きを魅せる玻璃を思わす、神経質な声。その声は、静かではあったが、有無を言わせない、秘めた力強さを持っていた。幻聴かと思ったが、そうではなかったらしい。

——早く

声はもう一度、そう言った。

身体が震えた。いや、硬直していたから、実際に震えとなって表に出ることはなかったが、そんな感覚が全身を走った。

すう、と誰かが大きく息を吸うのを聞いた気がした。そして次の瞬間、僕の身体は束縛を解かれる。突然、自由になった身体は平衡を崩し、僕はその場に倒れこんだ。

だが、倒れているのも一瞬のことで、意図せずにして手足が勝手に動き始める。

「ちょ、な、なんだよこれ！」

下手なダンスを踊っているかのような、不規則な動きはけれど

まっすぐ窓へ向かっていた。

「お兄ちゃん？」

さくらが不審げに僕を見ている。だが、僕はそれに答える余裕がない。あつたとしても、どう答えればいいのか分からなかっただろつ。

僕の身体は、二階の窓を乗り越えようとしていた。視界が大きく動き、庭の垣根、続いてコンクリートの地面を捉える。更に顔が無理矢理、上を仰がされた。そして、それだけには留まらず、左右を見渡す。何かを探しているかのように。けれど、僕自身は何かを探そうとしているわけではないのだ。

ややあつて、ぴたりと合わせられた視線の先には、張り巡らされたコードがあつた。

区域Cには様々なコードが繋がれている。それは勿論、家電を送るためのものであったり、ネット上の情報を送るものであったり、はたまた空調を精査するための探査機を通すためのものであったりする。僕の目ははつきりとそれらを捉えていた。

—— R 5 8 3 B

「…… R 5 8 3 B。……つて、えつ？」

先ほどの声の主が、訳の分からない英数字の羅列を呟いたかと思つと、どういふわけか僕の唇までがそれを鸚鵡おつひのように繰り返していた。

ばちん、と何かが弾けるような音がしたのはその刹那のこと。

音の正体は上空に架けられた無数のコードだった。この都市を動かし、制御するために情報を流すそれらが、火花を散らしながら千切れ、風に煽られて舞っていた。だがすぐに、意思を持つ生き物であるかのように、不自然に動き始める。

はあ、と今度は誰かが深く大きく息を吐いた気配を感じる。その息の主が、さっきから脳裏で言葉を発している者のものだと、僕はこのとき疑っていなかった。

そして次の瞬間には、体はコードに巻き取られ、そのまま宙に

放り上げられた。

視界が大きく動き、足の下の抵抗がなくなる。頬が風を切る感触が、こちらの不安を煽り立てる。窓の向こう側の、呆然とした表情のさくらが遠くなった。それから、僕の体は真つ逆様に落下していった。

「う、うわああああ！」

無様な叫びが喉を迸る。

そして、不意に近くで強い風音がしたと思うと、鈍く強い衝撃が僕を襲った。けれどそれは、墜落したための痛みではない。僕の身体の半分ぐらいの大きさの何かが、横から僕を受け止めたのだ。

角張った生暖かい感触のそれは、ほんの少しの間だけ飛び、そして僕とともに地に叩きつけられた。低く重い不協音が周囲に響き渡る。

何が起こったか分からず、僕は暫し放心していた。頭を何度も振っても、目眩めまいはなかなか治まってくれそうにない。ただ、全身を支配する激痛が、これが現実であることを告げていた。

自分を攫ったその硬くて熱を持つそれに、改めて目をやっている。それが何であるか理解するのに、時間がかかった。

その立方体は、無数のコードの尾を引いていた。無理矢理、引きちぎられたらしく、コードは無惨な中身を粗くさらけ出している。前面にはレンズが取り付けられていたが、それも罅割れていた。

知っている、これは監視カメラだ。街中にこういったものが取り付けられているのは別に珍しくもない。これが記録する映像は、防犯のためは勿論のこと、特殊な感知装置で大気を汚染する物質まで、視覚化する役目も担っている。ただのカメラにしては大きすぎるのは、その内部に、コードの他に複数のプログラムや浄化装置、犯罪者を捕獲するための捕縛弾等が含まれているからだ。

だがこのカメラがそれらの機能を失って死んでいるのは、傍目からも明らかだった。

何者かがカメラを破壊し、そして僕が直接コンクリートに衝突するのを防ぐべく、飛ばしたのだ。

「一体何が……」

発する言葉さえも、もはや自分のものとは思えない。それぐらいに、脳内が混乱で飽和されていた。

でも、その飽和状態すら打ち砕く、それとは比較にならない災厄が訪れるなんて、誰が想像できたろう。

本当に何がなんだか分からなかった。

次の瞬間には、自失している僕のすぐ近くで、耳を劈さく爆音が響き渡ったのである。

そして気付けば、身体は大きく吹き飛ばされていた。加えて、

先ほどとは違う種の苦痛が、容赦なく降りかかってくる。細かい砂塵が服を切り刻み、皮膚を裂いているのだ。更に、がんがんと脳天から響いてくる痛みがある。視界はやたらと眩しく感じて、まともに物を見ることすらできない。吹き飛ばされた時に、頭を打ったようだ。

その時、唐突に胃の腑を突き上げるような、強烈な不快感が襲ってきて、僕はその場に嘔吐した。喉の焼けつくような痛みは残ったものの、それでやっと心身が落ち着いてくる。相変わらず目はちかちかとしていたが、なんとかして現状を認識すべく、周囲を見渡す。

そこで、自分の目を疑った。そして、先程から目に刺さる光が、頭を打ったためだけではないことも知った。

目前に広がるのは、地獄の火焰^{かえん}。嬉々とした叫びを上げながら、紅蓮の炎が舞い上がり、濁った煙が蜷局^{とくる}を巻いている。

僕はその光景が理解できなかった。いや、全身全霊で理解することを拒絶していた。

巨大な炎の壁が包んでいるもの——それは紛れもなく僕の家だったのだ。

「嘘だろ……」

震える舌が唇から漏れる。そしてそれが合図であるかのよう
に、全身が小刻みに笑いだした。

「嘘だろ！」

もう一度、今度は大声を張りあげてみる。その罅割れた声は、僕の耳にしっかりと返ってきた。

異変を知った近所の住人が、手に荷物を持って、慌てて外へ飛び出してくる。彼らは皆、蒼白な顔で僕の家を見つめ、言葉を失っていた。中には、「テロだ！」と誰に向けてでもなく喚いている奴もいた。

これは、現実なのだ。現実は今起こっていることなのだ。
でも、そんなことは信じられない。信じたくなかった。

だって、あの家の中にはまだ僕の家族がいるのに。母や幼い妹が取り残されているのに……！そして、音酉ねとりもまた、あの中にいるのだ。

けれど、あの中にいて彼らがまだ無事であるとは、到底、考え辛かった。

窓の向こう側、僕の部屋で、外へ飛び出す僕を見つめていたさくらの無垢な瞳が、脳裏に浮かぶ。

同時に、何故、自分が家の外へ投げ出される羽目になったか、その理由を悟った。何者かが、こうなることを予測して僕を助けたのだ。けれど、どうして僕だけなんだ、と僕を操った知らない誰かを激しく恨んだ。

「嘘だあーっ！」

そんな喉を裂くような悲鳴は、次の爆破音に掻き消されて、誰の耳にも届くことはなかった。

頭上に広がる空は果てしなく遠く、そして惜しみない清々しさを与えて、地上を覆っている。しかしその暑さのため、空気は淀んでいた。その中で蝉がじりじりと遠慮がちに鳴きながら、鬱陶しい夏の始まりを喜んでいる。

けれどこれは作られた自然。ここは区域C——気候も環境もそこに生きる生命たちですら、人間によって作成されたプログラムで管理される、虚飾にまみれた落苑^{らくえん}。

そして僕は、その白々しい世界の中にいるのだ。

給水塔の作る影の上に仰向けに寝転がり、僕はそんなことを考えていた。

所詮、僕らの住まうこの地域は、作られた檻。嘘偽りの花を抱える、幻想の都市に過ぎない。

本当の現実とは、もっと黒々として生々しく、そして残酷だ。生きていることすら困難に思えるほど凄惨で、それでも必死に生きようとする者たちを、いとも簡単に嘲笑うことができる。

きつとそれが現実なのだ。

僕は、今回の一件でそれを思い知らされた。

家が爆破されたあの事件は、結局、外部の人間によるテロによるものだとして片付けられた。もともと、一番最初に疑いを持たれたのは、あの惨事の中、無事とはいかなくても奇跡的に——本当にあれは奇跡としかいいようがない——助かった僕と音西^{ねとろ}だったのだが。音西はあの時、一階のトイレに行っていたために、異変を感じてすぐに外へ脱出することが可能だった。けれども完全に災を免れることはできず、トイレの壁の下敷きになったらしい。ところが不幸中の幸いにして、その壁自体が彼女の身を守る盾となったということだった。

僕はといえば……あの時脳裏に響いた声、そして僕ではない何者

かによつて操られた身体のおかげで助かったのだが、それを必死に説明しても誰も信じてはくれなかった。当たり前の話だ。そんな非現実的なことを誰が信じるというのだろう。まともに誰かに分かつて貰おうとした僕の方が馬鹿だったのだ。しまいには精神科医たちに診察されたあげく、あまりにも悲劇的すぎる災難に直面したため、頭が混乱して虚偽の記憶を作ってしまったのだろう、ということにされてしまった。

そして僕自身も、あの一連の出来事が、実は全部夢だったのではなからうかと、次第にそう思うようになっていった。周囲の人間の言うとおり、自分で作りだした偽りの記憶なのだと。改めて振り返ってみれば、有り得ないことだらけだ。知らない人間の声が聞こえて、身体が勝手に動くなど、どうしてそんなことを思いこんでしまったのだろう。端からみれば、異常ととられるのが当然だ。現実離れたその体験を、思い返すのも馬鹿馬鹿しくなってしまった。

ところで、母とさくらはどうなったか？ 言うまでもない。あの地獄の中にいて命があるはずもなかった。三年前に父を亡くしていた僕は、こうして晴れて孤児となったわけだ。

民家爆破事件は、事件後数日の間こそ紙面を賑わしたものの、ある程度ネタが尽きたところで、言及されることすらなくなってしまうた。

それもそうだ。僕にとつての惨劇は他人にとつての物語でしかない。飽きたらもう読まれない、ただそれだけのこと。

そして都市は一月もすれば、何事もなかったかのように動き始める。

酷薄な現実を内包したまま、上辺だけの取り繕いを完璧にした都市の中で、人々はまた普段の生活に戻り、笑い合う。

だけど、僕だけがそれに取り残されていた。

悲しいとか、苦しいとか、悔しいとか、そういう感情はもはやない。そんなものは全て通り越していた。自分の許容量を遙かに超える絶望に面したとき、人はそれを認識するのを放棄するということを、

僕は始めて知った。

実感というものが、まるでなかった。全てが夢の出来事のように感じていた。

僕の家とそこに住む家族は、今もどこかで生活を営んでいる、どうしてもそんなふうに感じてしまうのだ。たとえば、店でお菓子を見つけたとき。さくらに買ってやろう、とつい思ってしまう。夕方になれば、母親が今日はどんな夕食を用意しているのだろう、と想像してしまう。そして、その次の瞬間に、帰る家も自分を待つ家族も既にないないという現実を思い出し、絶対零度の絶望に襲われる。

僕は寝返りをうった。できるだけ、身体を大きく動かさないように努力したつもりだったが、事故で負った傷が痛みを訴え、四肢は軋んだ。

思わず、顔が歪む。その痛みを振り払い、そして油断すれば胸内を支配しようとする痛嘆を追い払い、僕は思考に没頭することを選んだ。少なくとも、そうしていれば、取り乱すことはない。まだ精神の安定を保つことができる。

そうすると今度は、胸に大きな風穴を開けられたような心地がした。そしてそれが返って冷え冷えと、僕の思考を冷静にさせていた。だから、当事者でありながら、まるで他人事のように分析してしまう。あの事件のことを。

もしあれが外部テロだったとして、一体、犯人は何故、敢えて僕の家を狙ったのだろう。心当たりなどあるはずもない。僕の家族は区域Cの外で生活したことなどないのだから、恨みを買うこともないはずだ。ただ、研究員だった父親だけがたまにCの外に出ることもあったようだが、その親父も三年前に、研究室の事故で死んだ。

仮に、父が外部に出た際に何か憎まれることをしたとしても、そんな数年前のことで我が家を爆破することなどあり得るだろうか？ 親父がもういなくなつた我が家を敢えて？

一つ気になることと言えば、あの日、昼間に会つた野々瀬琳のせ りんとかいう女だ。あの女は僕が通う碧水学園へきすいを探していた。そしてどういうわけか、僕の名前も知っていた。

外部テロとであるのなら、あの女しか考えられない。そう、あの時、確かにあの女は火薬の異臭を漂わせていた。

けれども何故？ どうしてうちの家が犠牲にならねばならなかったのか？

区域Cの外——それは政府の目が行き届かない、無法地帯。最低限それ以下の生活を強いられた、犯罪と貧困と病苦が蔓延する世界。だから中には、区域Cで平和に暮らす僕たちを快く思っていない輩も少なくはない。だからか？ 安穩と生きる者たちが許せないから、

苦難を知らぬ者たちが許せないから、その腹いせのためにやったのか？　だとしたら、それは単なる逆恨みだ。

僕の家族が区域C外の地域を、荒廃させたのではない。それは昔からだ。

僕の家族が怠慢のままに、ただ平安を貪っていたのではない。こちらだって真剣に働き、勉学に励み、その報酬として今の生活があるのだから。犯罪に手を染めたわけでも、誰かを陥れたわけでもない、ただ平和に暮らしていただけなのに。それなのに……。

心の奥底に沈んでいたはずの怒りが、ふつふつと沸き上がる。よく研いだ刃で、全身を一気に切り裂かれたような疼きを錯覚する。そしてその疼きが、これが夢ではなく紛れもない現実であることを、また僕に思い出させるのだ。

知らず、爪が皮膚に食い込むほど、拳を硬く握りしめていた。その痛みにはつとして手を開く。掌には赤い筋がいくつかできていた。
「氷流……」

不意に、か細い声が耳に流れ込んできて、僕はそちらを振り返った。上空から降ってくる光を栗色の髪の上で反射させながら、ゆっくりと僕の方に近づいてくるその女は、音西ねとりだった。

予想外の訪問者に、僕は目を丸くする。

「お前、ここ屋上だぞ。その足でどうやって……」

「氷流のことが心配だったから、あたし、ちよつと頑張っちゃった」
てへへ、と崩したその笑顔は、どこか無理があった。

かこん、かこん、と彼女が動いたびに、その細い体を支える松葉杖が音を立てる。右足の脛から下をギプスで固定し、傷一つなかったはずの頬をガーゼで覆ったその姿は痛々しかった。命こそ助かったものの、彼女の身体には確実に災厄の跡が刻まれていた。

見ていられなくなって、思わず顔を背ける。けれど、その気配だけは少しずつ迫ってきていた。

「氷流……ねえ」

もう一度声をかけられて、また彼女の方に顔を向ける。想像して

いたよりも近くに音西の顔があつて、僕は一瞬、身を竦すくませた。

「次、体育だよ、分かつてるでしょ。みんな探してたよ……」

台詞の内容こそ詰るものだったが、その口調は責めるものではなかった。責めるものではないけれど、だからこそまた別の痛みが僕を覆う。

「いいんだよ」

「そっか……」

音西はそれ以上、詰め寄ってこようとはしなかった。だが、その場から離れようもしない。

重い沈黙が、二人の間に落ちる。でも、僕も音西もお互いに何を言えばいいのか分からなかったし、何を言っても全てを伝えられる気なんてしなかった。

音西も確かにあの事件の被害者だ。狙われたのは僕の家族なのに、全くの部外者でありながら、ただ運悪く遊びにきていたというだけで、巻き込まれた。だから僕は彼女に対して申し訳ないと思っている。

でも。

悪いのは僕ではない。僕が彼女を意図的に害したわけではない。それなのに、何故、僕が彼女に負い目を感じなければいけないのか。どうしてこんな理不尽な目に遭わなければいけないのか。

僕はその苛立ちから逃げ出せずにいた。

そしてそんな己を心底、醜いと思った。

優しくそよゆく風が髪を揺らす。ふと、下に広がる校庭から、賑わう声が本当に小さく響いてきた。ここまで聞こえてくるということは、かなりの大音量で騒いでいるのだろう。しかしここは、十階建て校舎のその屋上。彼らの騒ぎ声は幸か不幸か、微かにしか聞こえなかった。怒っているのだろうか、笑っているのだろうか、悔しがっているのだろうか、喜んでいるのだろうか——そんな様々な声が混ざり合い、意味のない騒音として流れている。

忌々しいほどに平和だった。あの中の誰が、この僕の気持ちを理解できるだろう。

ただただ平凡な日常をそのままに楽しむ彼らが、憎らしかった。何故ならもう僕はきつとそこには戻れないのだから。

が、その暗い思考がそれ以上、連鎖されることはなかった。突然、奇妙な音が鳴ったのだ。

その著しく場違いな音は、かなり近く——いや、僕自身から発せられていた。

きゅーぐるぐるぐる。

僕は腹を反射的に押さえる。すると同時に、痛めていた四肢が悲鳴を上げた。

「あ、いつて、くうっ！」

腹を押さえているのか、腕を押さえているのか分からない、奇妙な格好で僕はその場で蠢く。するとまた、傷の痛みと腹の虫が同時に自己主張をしてくれて、そのまま動けなくなってしまった。

「くっ、ぶっっ！」

隣で音酉^{ねとり}が吹き出す。長い髪が小刻みに震える肩と一緒に振動していた。

「……あんだよ」

寝転がったまま睨め付けてみたが、全然様になっていないだろうことは、我が事ながら重々、承知だ。

「だって、氷流ったら……おかしいっ！」

音酉はまだ笑い声を上げている。その表情は、さっきの作り物めいたものとはまるで違っていた。

「あー、もう！」

僕は痛みを無視して勢いよく起きあがる。そして服に付いた砂埃を軽く払った。

「教室からパン取ってくる」

惘然として言い放つと、くるりと踵を返す。

「あ、待って氷流、あたしもついてく！」

「お前のその足だと、倍時間がかかる。いい、すぐ戻ってくるし」
追ってきた音酉の声を後ろ手で払い、僕は屋上の出口に向かって歩き出した。

どんなに暗い気分でも、どん底にいても、体だけは正直に空腹を訴えてくる。いつそのこと飢えて死んでしまえばいいのに、どうやらそれもできそうになかった。

自分の肉体さえ思い通りにならないことにも、もどかしさを覚えながら、それでも僕はそれに逆らうことなく階段を降りて廊下を進み、そして教室の扉を開けた。

教室内には脱ぎ散らかされた衣服が散乱し、その上を窓から差し込んできた真夏の陽光が踊っている。誰もいないのにざわめきが聞こえてくるような錯覚をしそうになる場所。教室——何人もの生徒が笑い、泣き、はしゃぎ、勉強し、眠り、その全てを包み閉じこめてきたところ。そして僕も今までその一部だった。

それなのに、あの事件の後——何かが変わってしまった。そこにある安寧はこんなにも脆く崩れやすいものだということを突きつけ

られた。以来、今まで見えていたはずの全てのものが変わってしまった。

分からなくなって、しまったのだ。

例えば今いる教室という場所も、もはや僕との間に薄い膜を作ってしまったている。薄いのだけれど、もう二度と破ることのできない、強靱な膜。

僕は今、一体どこにいるのだろうか？

疑いもしなかった幸福と安寧は、はりぼてでしかなかったのか。本当の現実とは、ただひたすらに生きるに辛いものでしかなかったのか。

僕は今まで、一体何を見ていたのだろうか？　そして今見えている世界は何なのだろう？

——ねえ、氷流君、白星さんは君がとても心配です。君のつけているコンタクトは何色ですか？　ちゃんと透明ですか？

突然、苑華^{そのか}の台詞が脳裏に蘇ってきて、僕は身を強ばらせた。

あれはいつの時の何の会話だった？

僕は机の間を縫うように進み、自分の机の横に下がっている鞆を開けた。荷物で圧迫されて若干、変形したパンを手に取り、それを包む透明の袋を引っ張る。ペリ、と微かな音がして、袋が破れた。そしてその瞬間、思い出した。

ああ、あれはそうだった、僕がパッケージを読み間違えて、ツナではなく嫌いなチーズパンを買ってしまった時だ。ツナとチーズ。全然文字の形も違うのに、どこでどう間違えるんだ、という話になったんだっけ。多分、あれは文字のデザインが悪かったんだと思う。

——氷流君、よく見えてないんじゃないの？　コンタクト汚れてない？

あの時、苑華は笑いながらそう言った。だから僕は、大丈夫、汚れてないし、と——実は前夜つけっぱなしで寝ていて、朝起きてからそのまま使っていたため、内心、ぎくりとしていた——返した。あれは、その後の台詞だ。

——ねえ、氷流君、^{ひりゅう}白星さん^{しやうせい}は君がとても心配です。君のつけているコンタクトは何色ですか？　ちゃんと透明ですか？

——うるさいな、だから汚れてないって言ってるだろ

——それならいいや。これからもずっと汚れないといいね。気をつけなきゃ駄目だよ

——変な奴

何でいきなりあいつのこと思い出したんだか。

僕はパンを口に含んだ。否、^{いな}含もうとした。

途中でやめたのは、変なものが視界に映ったからだ。

——何だ？

それは、銀系のようなものだった。無数の細い糸が、煌めきながら窓の外で舞っていた。

窓の蒼穹を背景にして、ペンキが少ししかついていな刷毛^{はけ}で、すうと描いたような細い線。その一本一本は幻想的に輝き、まるで異世界にいるような気にさせる。

だがそれは僅かな間のこと。銀の系の群れはすぐに落下して窓の額縁の外へいく。

幻だったのだろうか、と思ったのも束の間、ところがまたそれはふわりと、舞い上がってきた。今度はもっと長く、もっと多く。窓の蒼さを払拭して銀系の占める面積が広がっていく。

二、三回それが繰り返されたとき、僕は手に持っていたパンを取り落としていた。

その銀系の中に、顔があつたのだ。白く小さなそれは、はつきりと僕の脛裏^{またつら}に焼き付いた。そして気付く、僕が糸だと思っていたものは、顔の主の髪だったのだ、と。

喉の奥に悲鳴を飲み込む。いや、正しくは喉が閉まって叫び声す

ら出なかったのだ。

また消えた銀髪と顔は、すぐにまた浮かび上がる、今度は上半身を伴って。そしてその次に上がってきた時には、余すことなく小柄な全身を現していた。

そのままその者は、ふわりと軽やかに、ベランダの塀の上に飛び乗った。

その拍子に舞い散る銀色の髪。その中で陶磁器のように白く浮かび上がるのは、整った少女の顔。十一、二歳といったところだろうか。丸みを帯びた輪郭が、まだ幼さを残している。そして、その顔に嵌められた赤い瞳は、鋭利な刃物の印象を抱かせるほど冷たく澄んでいて、真っ直ぐ僕を捕らえていた。

それは確かに、ここを見ているのかもしれないけれど、でも見えている世界は他の人間とは全く違うように映っているのかもしれない。そう感じさせる目だった。

蛇の目だ……。何故かその時そう思った。

これは夢だ、と自分に言い聞かせる。教室の他に研究室等の多大な設備を備えるこの学園は、学校というには規模が大きく十階建てで、ここはその九階なのだ。それなのに、ここまでの高さに人が飛び上がってくるなど、できるはずがない。

僕はその場に凍り付いたように動けなくなる。

少女は無言で手を上に挙げ、そしてそれをまた下げた。華奢な指がゆっくりと弧を描き、丁度、窓を上から下になぞるような形になる。

異変が生じたのはその直後のことだった。いや、その直前に、ふうんと空間が振動した気がした。

それからザンと荒い砂利を、それも大量に振り鳴らしたような音が響き、そして僕と少女を隔てていた一枚の窓が全壊した。

粉々に砕けた窓が、さん棧に収まっていたのはほんの一瞬。一瞬の後には、窓であったものは、粗い音を立てて砂のように崩れ落ちる。尖った光を放つ小さな硝子の欠片が、光の山を作った。

校内の警報がけたたましく鳴り始める。けれどそれでも僕は我に返ることなく呆然としていて、逃げるといふ選択肢すら思いつかなかった。また、目の前の少女もその整った眉をぴくりとも動かさずともしなかった。

少女はただ黙って、手を今度は僕に向かって差し出す。次に淡い桃色の唇を、初めて動かした。

「No.03——あなたを迎えにきたわ」

触れれば壊れてしいそうな硝子細工を連想させる——周囲に緊迫を強いる声。聞き覚えが、あった。それもそう遠くない過去に。

記憶にはすぐに辿り着く。そう、あの事件の時、僕に逃げるように指示したときの謎の声と、この声は一致していた。

警報は変わらず鳴っている。

「私と一緒に来なさい、死にたくなければ」

僕は啞然とする。彼女の言っている意味が分からなかった。

「何で、俺が死ぬんだよ……。お前、誰だ？」

喉はからからに渴いていた。少女はそんな僕を冷めた目で見据える。冷たいけれど強烈な意思を奥に隠した、その瞳。

「来なさい、苑華^{そのか}を助けたければ」

その台詞に混じった名に、僕の中の何かが反応した。

苑華——その懐かしい名。何度も忘れようとしたけれど、忘れられなかった名。僕にとって、後悔と甘い痛みそのものである名。

目の前の少女は「助けたければ」と言った。助けるとは、どういうことか。何か危険な目に遭っているということなのか。

つい、この間——そう、忌まわしい事件があったあの日——音酉^{ねとり}が苑華の話をしたばかりだ。結局は、彼女の指す『苑華』は、僕の知っている『苑華』とは別人だったのだけれど。

しかし、またその名が出てくる。この時期に、このタイミングでこれは果たして偶然なのか。

全く理解ができない。自分の前に起きている事態を、飲み込むことができない。

でも、少女は何も説明しようとはしなかった。彼女の真紅の双眸^{そうぼう}が、避けることなく僕に向けられている。差し出された可憐な手は、強制的に僕の手を握ろうとはしない。ただ、待っている。

胸の鼓動が速まった。上手く息が吸えない。上半身を締め付けられるような緊張が襲う。

——苑華^{そのか}、死んじやっただつてえ！

頭の中で、音酉^{ねとり}の明るい声が響いた。

同時に、僕の中で何かが弾ける。

少女の手はまだ僕の前にあった。

指先が震える。何か見えない『いと』で引つ張られるように、僕の腕が拳がる。でもそれは僕自身の糸。直感によって導き出された意図。

後に少女——天井野薔薇^{あまのいばら}——はこう語る。あなたが来てくれるか確信はなかったし、説明している暇も無かった、けれど前にしたように無理矢理、体を動かすことはしなくなかった、あなたに選ばせたかった、と……。

持ち上げていた腕を、ゆっくりと降ろす。それは短い間のできごとだったのかもしれない。けれど僕には大層長いことのように感じられた。長い時間をかけて、やっと少女の掌に自分のそれを重ねたように思った。

僕自身も振り返るに何故、あの選択をしたのか分からなかった。

でも、僕はその手を取ったのだ。僕の中の何かが、そうしろと、告げていた。

そして僕はそれをきっかけに、本当の意味で、今まで過ごしてきた平凡な日常に別れを告げることになるのだ。

「誰だ！　そこで何をしている！」

異変を知った警備員が数人、銃を手に教室に飛び込んでくる。

「すぐにその場から離れる！　何だお前はっ？」

「——エデン」

少女は短く答えると、存外に強い力で僕を引っ張る。そして彼女はなんと、そのまま窓から飛び降りた。つまり二人は、九階から落下する形になったわけである。

たまらなかった。本当に、たまったものではなかったのだ。

「ちよおつと待てええええええええええ！」

情けない悲鳴が僕の喉から飛び出る。これは僕がチキンだったかではなく、当然の反応なのだ。上まで——どうやってかは知らないが——飛び上がってきたこの少女ならいざ知らず、僕は空を飛ぶ術など心得ていない。

そうこうしている間にも、顔に体にもろに吹き付ける風の速度は激しくなっていく。それは加速度的に、落下スピードが増しているということだ。どんどん地面が近づいてきて、もう駄目かと——あともう少しで意識を手放してしまうほどの——恐怖に駆られたとき、強い衝撃がきて落下が止まった。

「ナイスキャッチー。やっぱ俺天才やわ」

バリバリと不快な機械音と共に、その場に似つかわしくない脳天気な声が頭上から降ってくる。僕と少女の体は頑丈な革で作られた太いベルトのようなもので、巻き取られていた。ベルトは今度は上に巻き上げられ、なにやら大きな鉄の固まりの側まで寄せられる。それが小型航空機の機体であると気づくのには、数秒かった。

「ほれほれ、上がりや。さっさとせんかい！」

機体の上に立ったゴーグルの男が、手招きをして急かす。

少女はというとベルトを腰に巻き付けたまま、慣れた仕草で乗り込んでいた。

何が何だか分からないままに、必死で上がろうとするものの、上手く行かない。当たり前だ、この小型機はもの凄い速度で飛んでいるのである。上がるより先にどこかに引っかけたて体の一部が飛んでいきそうな勢いだっただけ。

「急がんかい！ 足が吹っ飛んでまうで？」

男はこちらが今、脅威に感じたことをそのまま口にする。僕の方だつて急ぎたいのは山々だが、そのためには若干、スピードを落として貰いたいものだ。男に助けられもがきながら何とか上る。その刹那、がくと機体が大きく揺れた。

「ちくしょう！ 一発当てられた！」

品のない怒声上がる方に目をやれば、ヘルメットを被った女が操縦席で拳を叩きつけているところだった。女、と思ったのはその声からだ。……そして、その声にも聞き覚えがあつた。

「ああ、琳さん、俺のアネーちゃんをそない殴らんでえな！ 益々、傷付いてしまふやないかあ」

「雷、操縦代われ！ こんなのに四人も乗ってるから速度が出ないんだ。二手に分かれて巻くぞ」

こんなので、一応五人乗りやのに……とぶつぶつ文句を言いながら、ゴーグルの男——雷と呼ばれた男が渋々操縦席に座る。一方、ヘルメットの女は機体の側面に付いていた更に小さな小型機に乗り込み、本機からそれを外した。ごおん、と間近で大音量を発しながら、女の乗った機体は小さくなっていく。そしてそれを複数の別の航空機が追っていた。恐らく追っていた方は、学園側のものだが、しかし、まだ僕たちが乗っている方の機体を追うものもいくつかあった。

つまりのところ、僕はこの不審者らと共に、碧水へきすいから脱出しようとしているのだ。

それを把握した瞬間、後悔の波が押し寄せてくる。

「おい、降ろせよ！」

航空機の上で立ち上がるうとするが、揺れる機体に耐えられず、すぐに足を取られて転ぶ。すると、罵声が飛んできた。

「あんた、アホちゃうか！ 危ないやろが！」

そんなことを言われても、このようなことになったのは、全部こいつらのせいではないのか。

きつく睨んでやったが、ゴーグル男は操縦に夢中で、そんな僕の視線に気付いた様子もない。一方、銀髪の少女は顔を巡らせ、追ってくる航空機を検分するように見ていた。そして、小さく呟く。

「Jー？」

すると僕たちを追っていた方の航空機のうちの一つが、急に上空へと方向転換した。そしてそのまま、僕たちから離れて、遠くに飛んでいってしまう。

「Jー?? 違う、Tー？」

続いてもう一機が、今度は反対方向に急激に向きを変えた。次いでこちらも、僕たちから離れていった。

僕は言葉を失う。

何だこれは？ この少女が操作しているのか？

了解可能な範疇を超える出来事ばかりで、頭が混乱してくる。これは本当に現実に今、起きていることなのだろうか。実は全部夢なのではなからうか。

けれど、肌で感じる強い風の感触、ベルトで巻き取られたときにどこか痛めたらしい四肢の痛みは、本物だった。

絶句している僕を余所よそに、ゴーグル男が少女に声をかける。

「あんまり無理すんな、野薺^{のはい}。お前、波力^{エタイン}使いすぎや」

「……もうそんなに使わない。向こうが気付いて、回路を切られたら、それで終わりなもの。だからそれまでに巻いて」

そして僕が二人の声を聞いたのは、これが最後だった。少女の台詞の直後、また別の衝撃が——今度は僕の近くに——きて、今度はそ本当に意識を手放してしまったからだ。

次に目が覚めた時は天国か、それとも地獄か。それは、僕には知る由もなかった。

僕はいったいどうなったんだっけ？

まるで自分のものではないかのように、意識と体が重い。動かそうと力を入れても、筋肉が収縮する気配すらなかった。立っているのか寝ているのか、そもそも地についているのか、空中を浮遊しているのか、水中を漂っているのかさえ分からない。

曖昧なままの空間に取り残されている。

意識が？ 体が？

それすらも判然としなかった。

油断するとそのまま、どこまでも深く深く沈んでいきそうな思考を、必死に繋ぎ止める。

僕はいったいどうなってしまったんだ？

刹那、光が差し込んだような気がした。可視的なものではない、理解という名の、閃光。

脳裏に、眩い銀光と鮮やかな血の色が蘇る。それを兼ね備えていたのは、一人の少女。冷たい光を瞳に宿しながら、まっすぐにこちらを見据えていた。

——あなたを迎えにきたわ

少女が神経質な声を出す。差し出された白い手を視た気がした。

そう、あの銀髪で赤い瞳をした少女の言われるがままに、学校を飛び出し、そして……そうだ、そして乗り込んだ小型航空機の上で、僕は撃たれたのだ。

僕は死んだのか？ そうかもしれない。きっとここは生きている人間が楽園と呼ぶ場所。

ほら、楽園なんてそんなもの存在しないというのが分かるじゃない

いか。ここには花畑もないし、鳥一匹飛んでいやしない。それどころか何もない。

苑華、やっぱり僕が言ったことが正しかったんじゃないか。死んだら何もない。そこに残るのは――。

――ねえ、人は死んだらどこに行くのかな？

唐突に、よく透る声がぼんやりとした僕の心に入り込んできた。途端に拓ける視界。

瞼は思ったよりもずっと軽くて、ただ容赦なく差ししてくる燦然とした陽光がひたすら眩しくて、僕は腕で目の上に影を作った。

上空には雲一つ無い青空が、どこまでも広がっている。

無限で夢幻の夏のイメージ。苑華そのかに通じるイメージ。

苑華はあんなにも儂い印象を持っていたのに、あいつを思い出すときはいつも夏だ。

――死んだら、何も残らねえよ。全部、消えるの。無だよ、無

僕は道端に転がっていた小石を、意味もなく蹴っ飛ばした。

――うーん、何かそれって寂しいな

――別に寂しくないし。それって当たり前のことだから。それに俺はこう思うわけ。死んだら焼かれるだろ？ 焼いた煙は分子になって、散って自然に還るわけ。これもある意味輪廻だろ

何となく、普段から考えていたことを真面目に答えてしまった。

苑華が横で、ふふと笑う。

――成る程。氷流君ひりゅうは哲学的だね

――は？ どこが哲学的なんだよ

――ごめん、適当に言っただけ

――相変わらず訳分かんない奴だな。……で、お前は思うわけ？ 楽園があるって信じてるの？ 或いは輪廻転生とか？

女子学生が期待してそうな回答を、半分馬鹿にしながら言ってみ

る。

けれど、苑華は別に気分を害したふうもなく、腕を後ろに組んで、大空を仰いだ。そして目を閉じる。長い睫毛が、きめ細かい肌に影を作るのを、僕はなんとはなしに見ていた。

——私はね、天国ってのはあると思うよ

——へえ

白けてしまつて興味のない返事で流そうとしたのに、彼女は続けた。

——どこにあるのかなんて分からない。本当にあるのかなんて知らない

——でもお前、今、あるって言っただろ。ほんつと訳分かんねえ奴
苑華は柔らかな微笑を浮かべて、僕を見た。

敵意も害意もないはずのその表情に、逆に僕は戸惑う。

何故だろう、負けた気がする。けれどその負けが決して不快ではないのだ。むしろ居心地が良すぎて、居場所が分なくなる。そんな感覚。

——だけど、あるんだよ

今度は苑華は断定的に言った。

——だってそれは願いだもの

——何だよ、それ

掴み所のないその少女は、ふと唇で邪気のある三日月を描いた。

——じゃあね、氷流君、もし私が死んだら、君はどう思う？

あれ？ あの後、僕は何て答えたっけ？

青い空が、急に後退していく。

今いる場所ではない別世界が、無理矢理割って入ってくる気配がする。

これは覚醒の兆候。目が覚めたときは天国か？ それとも地獄か？

あいつらに会う——否、遭うことになったんだから、地獄だよな。後に僕はそう言うようになる。でも、虚飾の天国ではない、気持ちがいいほど遅しく力強い地獄なんだから、ずっといいさ、と。扉はもう、すぐそこ、だった。

「琳^{りん}さんやなかったら、誰が俺のカレーパン食ったんや！」

覚醒は唐突に訪れさせられた。独特の訛のある怒声によって。

なんだ？

目を開こうとするが、これがなかなか上手くいかない。瞼の裏が眼球に貼り付いたように、小さな痛みを訴える。それでも思い切つて開けると、視界に今、自分がいる環境が映し出された。

真っ先に目に映つたのは、灰色の壁だ。薄汚れていて、何のものが分からない染みがいたるところにこびり付いている。それで、僕は自分がどこかの部屋にいるらしい、ということが分かった。室内にある明かりは、天井から下がる電球が二つばかり。部屋全体を照らし出すには、その明かりは乏しすぎて、壁際は闇に落ちている。そして僕は、その暗がりの中に横たわっていた。

こんな明かりすら満足にない、かつ手入れも行き届いていないような部屋など、異質以外のなんでもない。深夜であっても本や漫画を読むに困らない蛍光灯、よく掃除された床、白い壁——僕がこれまで、当然のように暮らしていた環境とは程遠かった。

「知らんものは知らん！ どうせお前、自分で食べて忘れたんだろうが！」

不意に、女の怒鳴り声が耳を打つ。乱暴な声を張り上げているのは、艶のある黒髪の女だった。勝ち気そうな瞳が、目前に立つ茶髪の男をきつく睨んでいる。

この女、見覚えがある。

そう、僕の家が爆破された事件のあった日、碧^{へきすい}水学園への道のりを聞いてきた女に違いなかった。いや、その後にも一回、会った。学校から脱出する羽目になったとき、航空機を操縦していたのが確か、この女だった。女にしてはえらく乱暴な口調と、低い声音が強烈に記憶に刻み込まれている。

「いいや、食ってない。絶対食ってない！ 第一、食つとつたら、こないに腹減ってへんわ！」

そしてこの訛男にも覚えがあった。正確にはその訛口調に、だ。というのも、会ったときは男はゴーグルをしていて、顔を把握できていなかったからだ。今、こうやって見てみると——怒ってはいいるのだろうが——、一重で細めの目と、若干下がり気味の眉がなんとなく剽軽な印象を付与している。年齢は僕より少し上——十八、九といったところかもしれない。

そして、激しい火花を散らす二人から少し離れて、人形のように綺麗な容姿をした少女が、溜息を吐くでもなく呆れるでもなく、まるで無関心にその白髪を、櫛で梳いていた。

一体、何なんだここは。ここが天国とてんというのなら、大層騒々しい天国だ。

力を入れて身を起こそうとしたが、全身に痛みが走って、痙攣するようにしか動けない。信じられないぐらい時間をかけて、上半身だけ起こすのがやっとだった。そこでやっと、僕は腕やら足やらの、恐らく擦り傷を負ったところにガーゼが巻かれ、数力所に湿布が貼られていることに気付いた。恐らく、その湿布の下は青黒く変色しているのだろう。鈍い痛みをしきりに訴えている。どうやら気を失っている間に、手当てをしてくれたらしい。

だけど、こいつらは一体何なんだ？

僕が訝しがる間にも、訛男と乱暴女は相変わらず口論が続けている。

「お前がどれだけ腹減ってようと、私の知ったことか！ 食うより働け！」

「何やと！ 働いとるやないか！ あの小型機も武器も通信機も誰が作ったと思うてんのやつ？」

「あー、そうさお前が作ったんだ！ だがな、それに積んであるプログラムを組んだのは、他でもないこの私だ！ そして組み立てたのがお前だ。だからほんの五、六発当てられるぐらいで使い物にな

らなくなるほどの檻ほろ褻なわけさ！」

「檻褻で、俺のアネーちゃんを檻褻で！ もう今日という今日は許さへんで！ そもそもぶっ壊れたんは、あんたの操縦がどんくそうで、あいつらに簡単に撃たれたせいやる！」

「何だと！ 貴様だつて人のこと言えんぐらい、いや、私以上にくらつてたじゃないか！」

二人の議論は更に白熱していくばかり。まったく、カレーパンごときでよくもまあ、こんなにも本気に喩み合えるものだ。もっとも、内容は本題からだいぶズレてきてはいるが。

僕は少女の方にそろそろと視線を戻してみる。彼女は、さっきから我関せずとばかりに、黙々と整髪に勤しんでいた。そのさらさらとした髪は粉砂糖の色をしていて、それがふと違和感を覚えさせる。その理由はすぐに分かった。記憶の中の少女の髪は白銀色だったのだ。だが、今の少女の髪は、混じりけのない純白で、目を射抜く輝きを発してはいない。もしかしたら、学校で見たあの銀は、眩しい太陽がみせた悪戯だったのかもしれない。

不意に、少女が初めてこちらを見た。人間らしい情の欠如した、冷徹な双眸を向けられて、僕は一瞬、怯ひるむ。少女は僕が起きていることを認めると、口を小さく開けた。多分、何か呟いたのだろうが、訛男と乱暴女の罵声のお陰で、その声は聞き取ることができなかった。

少女は座っていた椅子から降り、喧嘩真つ最中の二人に歩み寄る。彼女が歩きたび、黒いワンピースの裾が優雅に揺れた。

少女が近くまで寄ったところで、彼らは彼女に気付き、そこで口を噤んだ。

「お客さん、お目覚めよ」

少女の柘榴色の双眸が、鋭く僕を見据える。氷のような冷たさを孕んだその瞳は、僕を認めた瞬間、ちらりと揺れた。

ついさっきこの目に見つめられたときは、なんて無感情なものだろう、と思った。同時に、彼女はこういう人間なのかも知れない、とも感じた。感情の起伏があまりないか、あってもあまり表に出さない種の人間。あまりにも心が表面に出ないものだから、こんなにも冷え冷えと映るのだろう、と。

でも僕は自分の考えに、今、疑いを持った。

違う。いや確かにこの少女はもともとそんなに表情豊かな方ではないのかもしれない。けれど心を見せていないのではない。

そう、見せているからこそ、こんなにも凍りついているのだ。

一瞬だけ露わにした、瞳の中に潜む研ぎ澄まされた刃。そしてそれは他でもない僕に向けられていた。

言葉にするのなら、憎悪。

そんな馬鹿な、そんなはずはない、と僕は思い直す。僕には少女の恨みを買わねばならない心当たりなど全くないのだから。多分、僕の被害妄想か、見間違いだ。

半分身を起こしたまま固まった僕を不審に思ったのか、少女は眉を顰めた。そしてふいと顔を背ける。

「お早う、君は丸一日眠っていたよ。調子はどうだい、縄田君？」

面白そうに声をかけてきたのは、先ほどの乱暴女だった。名前は確か野々瀬とか言ったか。

「え、あ……」

咄嗟に何をどう返したらいいのか分からず、言い淀む。すると男の方が助け船を出してくれた。

「あんだけ全身に打撲あつたら、気分は良くないやろ。ま、数日大人しくしておけば軽くなるわ」

男は人の良さそうな笑みを浮かべる。

「あ、あんたら一体……？」

「俺は西野雷^{にしのだい}、雷^{らい}って呼んでえや。一応、ここでは機器専門^{ききせんもん}ってことになつとる。……ほんで、俺のカレーパン食つたこの粗野な女が……っ痛！」

「私はお前のカレーパンなんぞ食べてないし、粗野でもない」

野々瀬は雷の頭に容赦なく拳を見舞わせていた。雷は頭を押さえ、彼女を睨め付ける。

「野々瀬……」

呆然とその名を口にしたのは、雷ではなく僕だった。野々瀬は片眉を少し上げる。

「ほう、名乗つたのは一度だけだったが、覚えていたか。どうやらその頭は飾りではなかったらしい」

初対面の時と変わらない嫌味っぷりに、僕は顔を顰めざるを得ない。

どうやらこの女と、仲良くしていくのは無理そうだった。勿論、そんなつもりなど毛頭ないが。

一方、雷は意外そうに僕と野々瀬を交互に見る。

「なんや、会^あつたことあるんかいな。……あと、ここにいる女の子が天井野薔薇^{あまいのばら}、あんたの仲間や」

「……仲間？」

少女——野薔薇はちらりと一瞥^{いちべつ}をくれる。けれどそれ以上のことはなく、この場では当然、有り得そうな、宜しく、初めまして等の言葉を発することはない。ただ無言で、また目を逸らしただけだった。

「と、いうわけで、これから目的を同じくする同志として仲良くや
つていこうな。縄田氷流君、区域Disasterへようこそ！」
雷は含みのある笑いを浮かべ、僕に向かって手を差し出した。

区域D——そこは荒れ果てた世界。遙かなる昔に破壊しつくされ、搾取さくしゅされつくした環境のみが延々と広がる場所。

乾いた赤い砂には栄養もなく、そこに育つ植物は殆どほとんない。浄化する木々がないその場所の空気は濁り、有害物質が至る所を飛翔している。それが益々、土を汚し、それでも必死に生きようとする生き物たちの命を容赦なく脅かし、奪っていくのだ。

吹き荒ぶ熱風は肌を傷つけ、建物の外で立つていくことすら苦痛を覚える世界。

故に、そこは区域Disasterと呼ばれていた。区域DのDがディザスターという意味を含んでいるのではない。その区域にDの記号がふられるのが先だった。しかし、誰が呼び始めたというのでもなく、Dからディザスターと呼ばれるようになったのだ。

区域CがClearとして知られるのに対して、Disaster、と。

災害、惨事、不幸——区域Dはまさにその呼び名の相応しいところだった。

そして僕はどういうわけか、妙な奴らに連れ去られ、そんな区域Dに身を置いていた。

「え、あ、あれ？　こういう時は君の方からも手を出して欲しいんやけど……」

雷らいが手を出したまま、困ったように苦笑いを浮かべる。でも僕は、正直それどころではなかった。

「ちょっと待てよ！　何だよ、仲間だとか、同志だとか！　俺はあんたらのことなんか全然知らないし、仲間になった覚えもないんだけど」

そう叫んで、三人を顔を見渡す。まるで戦闘着のような、身体の曲線を綺麗に出す衣服に身を包む野々瀬ののせ。あちこちに汚れが飛んで

いて、ところどころ裂けてすらいる、よれよれの作業着の雷。そして、二人よりは比較的小綺麗な身なりではあるけれど、白いフリルさえついていなければ喪服と見まごう、黒を基調としたワンピースを着ている野薔薇^{のばら}。三人が三人とも、区域Cでは見ないような、一風変わった格好をしていた。そんな彼等のその服装は、ただならぬものを感じさせるには充分なもので。

極めつけは、貧困そのものの不潔で暗いこの部屋。更に、その部屋に散っている武器や防具。平安とは懸け離れた、物騒なそれら。

これ以上の説明は不要だった。聞かなくても分かる、こいつらはアンガバ——区域Cの繁栄を潰す反乱組織の一つだ。

区域Cが軍事都市に囲まれているのは、そういう理由があるからだ。C外にはその存在を快く思わない輩^{やから}が跋扈^{はつご}している。彼らは区域Cの恵まれた環境を妬^{ねた}み、隙あらばそれを破壊しようとする奴らだ。

区域Cの中でも研究機関の充実した碧水学園^{へきすい}に侵入することといい、こうやって区域Dに拠点を構えていることといい、こいつらが反C組織であることと何の矛盾もなかった。

雷は呆然とした顔になる。そして、僕と女二人を見比べた。

「彼は何も知らないんだ、雷」

野々瀬が腕組みをしたまま言った。すると雷は、額に皺を寄せて眉を上げる。

「え？ そうなん？」

野々瀬は僕の方に視線をやる。そして前髪を掻き上げて、軽く嘆息した。

「さて、何から説明したらいいものやら……」

「……あんたら、一体、何なんだよ！ 何で俺をここに連れてきた」とすると、彼女は今度は深く息を吐く。

「全く、助けたのだから感謝されてもいいが、こんなに噛みつかれる筋合いはないんだがな」

「は？ 俺はあんたらに助けられた記憶なんてこれっぽちもねえん

「だけど！」

「無知とは厄介なものだな。……でも何も知らない君も、苑華そのかのことは知っているだろう」

野々瀬の口調はどこまでも傲岸不遜だった。それでも思わず息を呑んだのは、よく知っている名前が彼女の口から発せられたからだ。耳に馴染みのあるその名前。会えなくなつてからでも、ふとその名を聞くだけで心に小さな動揺が走る。いなくなつてから、その大切さに気付くなんて、ありふれた話だ。だが、それでも僕はその意味を身を以て知っていた。

忘れたつもりでいても、胸のどこかでちくりと棘が刺す。会えないという、傍にいないという痛み。そして今この時も、その小さな痛みで、平常心を完全には保つことができないのだ。

「苑華そのかつて……」

呟く声は、知らず掠れていた。口の中が、急に貼り付くように乾き、喋りにくい。

「そう、白星苑華しほしのことだよ。知っているだろう？」

「何で……あいつとあんたらと何の関係が」

「我々は彼女を助けたい。そして君の協力が欲しい」

「助ける……？」

野々瀬は近くにあつた机の方に体を向ける。乱雑に散らかったその上を、更に引っかき回して、彼女はデンプを引っ張り出した。

所々が痛み歪んだそれは、画面自体にも傷んでいる部分があり、加えて画質そのものも粗かった。見た感じ、恐らく二十年ほど前の代物ではないかと思わせるほどの、古品だ。しかも壊れかけている。

ここ区域Dでは、そんなものでさえも手に入れるのがやっとなのだろう。さり気なく周囲を見渡せば、そこら中に置いてあるのは一昔前の製品や、或いは自作したと思われる不格好な塊ばかりだった。僕は急に自分がタイムスリップしてきたかのような奇妙な感覚に陥る。

ののせ 野々瀬はそんな僕に、傷だらけのデンプを広げた。

「それでは、このニュースは知っているかな？」

促されるがままに、それに目を通した僕は、唾を飲み込んだ。

読まれたそれは、つい最近知ったばかりの記事だったからだ。

『かむやしあん神谷紫苑社長ご令嬢——そのか苑華さん、十五日急性心筋梗塞のため死去。享年、二十五歳』

僕は息を呑んだ。

胸内で一つの小さな泡が生じる。そしてそれは、大きく成長し一気にその数を増す。はらわた腸が煮えくりかえるような怒りは、そのまま心の大部分を埋め尽くしていった。

不快だった、不快なこと極まりなかった。

——苑華、死んじゃったんだってえ！

耳の奥から、跳ねるような音西ねとりの声が響いてくる。

僕は知らず拳こぶしを固く握りしめていた。

「お前らまで……っ！ 一体何考えてんだよ！ その記事がどうしたってんだ。この苑華はあの苑華じゃねえ！」

溢れ出す激情をそのまま、目前に佇む女にぶつける。しかし、野々瀬は嫌味なほど冷静で、表情一つ変えようとはしなかった。

「はて、『まで』……？ 私の他に誰かに言われたのかな？ ……まあいい。取り敢えずはつきりしているのは、この記事に載っているのは、君の言うあの苑華、だ」

「んなわけないだろ！ だってあいつの年齢は、俺と同じで今は十

七のはずだし、第一、誰も神谷のそこに行くなんて言っていなかった。あれはあいつの法螺^{ほら}だ！」

すると、野々瀬は目を細める。そして相変わらず静かに落ち着いた声で呟いた。

「ほう……、君の台詞からすると、苑華は君にだけはあの男のここに行くことを伝えていたわけか、成る程、成る程」

「だから、それは嘘だつて言ってるじゃねえか！」

僕は粗く息を吐く。自分でも、何に對してこんなにも腹を立てているのか分からなかった。

また苑華をネタに使われたことか？ それともこんな訳の分からない奴らに、あいつの名前を口にされたことか？

それとも。

「そう、この記事は嘘だ」

「は？」

呆気なく否定され、虚をつかれて僕は言葉を失う。

何の脈絡もないように会話を進める、野々瀬の意図が理解できなかった。

彼女は椅子に腰を降ろして、机に両肘をつき指を組み合わせる。

そして親指で自分の顎を支えながら、吐き出すように言った。

「白星苑華^{しほし}は死んでいない、生きている。極めて危険な状態にあることは確かだろうが」

「え……？」

意味が分からず、僕はまじまじと野々瀬を見つめる。

彼女は少し顔を横に向けて、野薔薇に声をかけた。

「そつだろう、野薔薇^{のばら}？」

濁りのない白髪^{しろ髪}の少女は、一つ瞬きをして答える。

「ええ」

だが、それ以上は何も言わなかった。野々瀬は思わず苦笑する。

「あいつだけは、苑華の思念を受け取ることができるんだ。エデンだからな」

その説明は全く要領を得ないものだった。けれど、一つの単語に引っかかりを覚える。決して見過ごすことのできない、その響き。

——私はもう一つ名前を持っていて、昔、『エデン』と呼ばれていました

僕は瞠目した。

エデン——それは苑華が最後に残した彼女のもう一つの呼称。その時は特に気にしてはいなかったのだけれど。

それがまた出てくる。彼女の名前と共に。

「何なんだよ……エデン、って。あんたら、一体苑華の何なんだ？」
野々瀬は暫しの間黙っていたが、やがて近くにある椅子を顎でしやくった。

「話が長くなりそうだから、まあ取り敢えず座りたまえ。立ち話もなんだしな。ただでさえ君は怪我を負っている身だし」

言われるがままに、僕は腰を降ろした。

しかし次の瞬間、尻の下に奇妙なものを感じる。何か柔らかいものがあたったのだ。上半身の重さに簡単に屈してしまう、抵抗のない感触。

僕はもう一度立ち上がり、その妙な物体を確認する。そして哀れなそれを摘み上げた。

「あの、これ……」

背もたれに寄りかかり、すっかりくつろいでいた野々瀬は首を傾げる。ところが僕が手にしているものを認めると、にわかに目つきが鋭くなった。

「それは……！」

雷までもが立ち上がり、口を開けている。

「あの、すいません、俺、この上に座っちゃったみたいなんですけど……」

僕が持っていたもの——それは、ひしゃげて中身がグロテスクに露出したカレーパンだった。

透明の袋に包まれていたから、僕の手や尻や椅子が汚れることはない。だがパンは、押し出されたルーと、圧力による変形のために、無惨な形骸^{けいがい}を晒している。

「あ、ああ！ 俺のカレーパン！ パンの上に尻を乗せるとは……
とんだ罰当たりなやつちゃ！」

雷が僕の手から、カレーパンをひったくる。反射的に再度、謝罪したものの、僕が一方的に恨みがましい視線を投げつけられるのは、何かが違うような気がした。

「うるさいぞ、この穀潰し！ みろ、やっぱり私のせいじゃなかったんじゃないか！ まずは濡れ衣を着せたことを謝れ！」

野々瀬が今度は雷の腰に、一発拳を入れる。それが引き金になって、二人はまた罵詈雑言の数々を浴びせ合い始めた。

まったく、たかだかパン一個でどうしてこうも本気になれるのだろう。そもそも、多少潰れていたって食べられないわけじゃなし——とはいえ、袋で保護されていたものの、男の尻の下に敷かれたものを、何の抵抗も無く食せるかと問われれば、僕だって流石に躊躇するもしれないが——、どうしても潰れているのが嫌なら、また買ってくれば済む話だ。

全く、本当に……。

「理解できない」

まるで心を読み透かされたかのような言葉に驚いて、僕はその冷たい声の主をみた。

「今、そう思ったでしょ？」

野薔薇は目を細める。はつきりした二重に飾られた長く整った睫毛が、ふり零れるような妖しさを放っている。

僕は喉の奥が石膏で塗り固められてしまったかのように、何も返すことができなかった。

「そう、理解できないのよ。あなたみたいにこれから来た人たちにはね」

こちらを見下すような声色が、針のように突き刺さる。白い顔の

中で薄く色づいた桜桃の唇は、特に形を変えていない。それなのに、そのはずなのに……何故か僕は、その桜桃に嗤われているような気が、した。

野薔薇は細い腕を、つい、と野々瀬の方に延ばす。そして抑揚のない声で言った。

「琳^{りん}、まだ話の途中」

ぎゃあぎゃああと喚いていた乱暴女は、すぐに我に返りまた椅子に腰掛ける。

「や、これは失礼。で、何の話だったかな？」

カレーパン一個のせいで、僕でさえも忘れかけていたが、すぐに思い出した。

それは覚えていたつもりはなくとも、記憶に残っていた鍵。

「エデン……、エデンって何なんだ？」

野々瀬が先ほど口にした『エデン』と、苑華の言う『エデン』とは全く関係のないものなのかもしれない。それでも聞かずにはおられなかった。

「エデン——全ては神谷^{かむや}の樂園^{エデンプロジェクト}計画から始まったんだ」

「エデン・プロジェクト？」

野々瀬は腰に巻いた小型のバッグから、四角い板を取り出す。それを開くと一人の男の上半身の立体映像が現れた。太い眉の、がっしりした顎をした中年の男。その精悍な顔立ちの下にはEden Companyと記された文字の帯が流れていた。

「神谷紫苑社長、表向きは大手情報社の社長、ということになっているな。君も名前ぐらいは聞いたことがあるだろう」

知らないはずはない。

エデンカンパニーはもともとそれほど有名な会社ではなく、大きくもなかった。それがここ二年で、その名を知らぬものはないほどまでに、急速に成長した。そしてそれを可能にしたのが、エデンカンパニーの社長、神谷紫苑というわけだ。ところが彼は希代の変人で、支社どころか本社ですら区域C内に置いてはいない。

また、実はそんな彼の養女であつたと言つて、苑華そのかは区域Cから出ていった。

「そいつが、どうかしたのか？ まさか苑華は本当にそいつのところに……」

「苑華は神谷にとってはなくてはならない存在だった、それは確かだ。だが、それはあくまでも過去のこと。奴は苑華が邪魔になつた」
「邪魔？」

「苑華はエデン・プロジェクトから離反した。苑華が区域Cを去つたのは、神谷のところに自ら乗り込むためだ。戦いを挑みに、な。結局は負けたようだが」

「何……だつて？」

この女は何を言っているんだ？

戦う？ 誰が？ 誰と？ 何のために？

負けた？ 何に？

理解が追いつかず、胸の内で反芻はんすつする野々瀬の言葉が、ただするすると流れている。

突飛すぎた。余りにも突飛すぎて、その内容が心の中に落ちることはなかった。

そして気が付くと僕は盛大に笑いだしていた。その場にいる全員が、僕を奇妙な目で見る。でもそれにも構わず、ただひたすら笑い続けていた。

「ばっかばかしい。そんな作り話で、俺を騙せると思ったわけ？ 分かつたぞ、あんたらはただの誘拐犯で、区域Cの住民を妬むテロリストだろ！ 欲しいものは何だ？ 金か？ 仕事か？ 言ってみるよ！」

言い募るほど内なる轟音が増してくる。頭の中からか、胸内からか、耳の奥からか、それとも全身からか、皮膚に振動が伝わってきた。そうなぐらいの轟きが起こる。けれど轟きは、皮膚を突き破ることではなく、代わりに無分別に臓腑ぞうふを蹂躪じゅうりつし、体内で猛威まういを振るう。

行き場のない負のエネルギーを、僕は握り拳で机に叩きつけた。拳の底がじんじんと苦痛を訴える。でもそれ以上に、僕は胸の内の激しい渦に支配されていた。

「違う！ 作り話でも何でもない！」

野々瀬ののせが声を荒げる。だが、僕はそれすらも叩き潰すような勢いで叫んだ。

「俺の家を爆破させたのも、どうせあんたらなんだろ！ 返せよ！ さくらを返せよ！ 母さんを帰せよ！ 俺の日常を返せよ！」

もう一度、拳を叩きつける。鋭いような鈍いような痛みが走った。どこか切ったのかもしれない。

けれどそうまでしても、強く速い胸の鼓動は止まらない。鼻と喉の奥が圧迫されるような感覚を覚えて、目頭が熱くなった。

「返せよ！ なあ、返せ！」

頬を流れる熱を抑えることも忘れて、僕は声が枯れそうになるまで叫んでいた。

頭の前部が押し潰されるように痛い。胸内で猛威をふるう激情に、そのまま翻弄され、我を失いそうになる。そのまま、激しい怒りに意思を飲み込まれそうになった時のことだった。

「あなた、うるさい」

全ての光を跳ね返す硝子のような声が、僕の鼓膜を打った。

いつの間にか、野薔薇のいばが僕の目の前に二本の指を突き出していた。いや、正しくは額の前に、だ。

そして彼女の長い髪は、不可思議な輝きを纏っていた。一本一本が煌めく銀に染め上げられ、淡い燐光を帯びていたのだ。

「少し黙って最後まで話を聞いたら？」

彼女が言い終わらないうちに、体が不可視の何かで縛られる。動かそうと思っても体が言うことを聞いてくれない。抵抗すればする

ほど、益々がんにがらめに拘束されていく。

これは以前にも体験したことがあった。そう、僕の家が爆破がされる直前、僕を窓まで動かしたあの力だ。

「野薔薇、こいつにはこいつの思いつてのあるやる。まあ勘弁してやれ」

雷が頭を搔きながら、少女を宥める。

少女は僕の目を見て、屈辱にも降参の意を汲み取ったらしく、挙げていた手を下ろした。途端に彼女の髪はもとの純白に戻り、そして僕の身体も解放される。

ただ、先ほど受けた圧力の気持ち悪さだけが遺されていて、僕の息は上がっていた。

野々瀬が口を閉じたまま、鼻で大きく息を吐く。

「言っておくが、君の家に爆弾を仕掛けたのは我々ではないし、しかもその災厄から君の身を守ったのは野薔薇だ。そこは誤解しないで貰いたい」

僕はといえば、先ほどの正体不明の力がまだ体のどこに残っているような気がして、気味悪さのために精神的余裕などなかった。だから、一つ頷くのがやっとだった。

野々瀬は、ほっと安堵の表情を浮かべる。

「分かってくれたのなら、それでいい。……それと、野薔薇のことをあまり不気味に思わないで欲しい。彼女もまた、エデン・プロジェクトの被害者なのだから」

エデン——その単語が琴線に触れた。

エデン・プロジェクト。そのプロジェクトを発動させた神谷と、そのか苑華は戦いにいったと、野々瀬は先程、確かにそう言った。

でも何の戦いだというのだろう。そして苑華が挑んだものは何だ？ 未だ震えの治まらない手を握りしめ、野薔薇に対して感じていた恐怖を無理矢理押さえつける。そんなものに取り憑かれている場合ではなかった。知らなければならぬことが、あった。

「何なんだよ、エデン・プロジェクトって……？」

野々瀬は切れ長の目で僕を直視した。気丈さを感じさせる、力強い眼差し。曲がることなく、迷うことなく真っ直ぐにこちらを見つめてくる。恐らくその視線だけで、圧倒される者も少なくはないはずだ。

「神谷^{かむや}が一番恐れていたもの、そして今も恐れているものは何だと思っ？」

彼女は柔らかかみの欠片も匂わせない、けれどどこかそれが返って艶めかしさを漂わせる声で問うた。

そんなこと知っているはずもないし、想像もつかない。僕が黙っている、野々瀬はまた口を開いた。

「それは『老い』と『死』だよ。そして『自分の思い通りにならない世界』」

「え——？」

「だから神谷は、老いも死もない、そして自分の思い通りになる世界を構築しようとした。それがプロジェクトの始まりだ」

「ちよつと待てよ。そんな世界なんのできるわけないじゃないか」

野々瀬は長い人差し指を立てる。そして早口で捲^まき立てた。

「そう、できるわけがない！ でも奴は狂っていた。奴は神になるうとしたんだ」

「神って……」

「けれどそんな楽園を造るためには、まず研究が必要だ。そして研究のためには実験が、その実験のためには実験台が必要だった。：

…神谷^{かむや}はそこで、区域Dにひっそりと暮らしていた、一人の少女に目をつける。両親をとうに亡くし身寄りもなく、かつこれといって目立った存在ではなかったその少女は、実験には打って付けだった。神谷は食べ物に困らない生活と、学問に打ち込める環境を用意することを条件に、彼女に実験台になることを提案したんだ。それまで死ぬか生きるかのぎりぎりのところで彷徨っていた少女にとっては、断る理由なんてなかった。おまけに成功すれば、永遠の命が手に入るというのだからな」

嫌な予感がした。何かとてつもない嫌な予感。そしてこういう予感は往々にしてよく当たるということを、僕は知っている。

それ以上の話は聞きたくなかった。けれど野々瀬^{ののせ}はまた話を紡ぎ、僕の耳は僕の意味を無視して、確実にそれを捕らえるのだ。

「人の遺伝子にはテロメアという構造が存在する。簡単に説明すると、人は細胞分裂の度にこの構造が短くなり、その短くなった分だけ老化が進む」

それを聞いて、僕は幼い頃に読んだ『蠟燭の話』を思い出す。

死の世界には無数の蠟燭があり、その一本一本に名前が刻まれ、刻まれた人の寿命を決定している。蠟燭は燃えるうちに次第に短くなっていき、限界まで短くなったところで炎が消え、そしてその炎が消えたとき、その蠟燭に書かれた名前の人間は死ぬのだと。

人を構成する数え切れぬ細胞の数々——その中に揺らめく灯火^{ともしび}を見た気がして、僕は頭を振った。

野々瀬は続けた。

「だが、そのテロメアを伸ばすことのできる酵素が存在する。それがテロメラゼと呼ばれるものだ。……神谷はそれに目を付けた。

簡単に言うと、神谷はテロメラーゼを永遠に産み出し続ける命令を持つ遺伝子コードを、実験台の少女の中に埋め込んだ。所謂、遺伝子操作ってやつだな。実際はもっと複雑なものだったが」

語る彼女の口調には、激しい怒りが潜んでいた。努めて穏やかにしようとしているようだが、それでも彼女の中で煮え滾る、やり場のない憤りが見え隠れしていた。

「少女の成長は途中で止まり、実験は成功したかにみえた。でも、結局は失敗した。当たり前だ、寿命のない人間など作れるものか！実験台にされた少女の身体に至る所には、腫瘍が生じてしまった。腫瘍はそれ自体が寿命を持たない出来物だ。人の細胞は生と死のサイクルを繰り返して数を保っているのに、その出来物はプログラム死^スを知らないままに無限に増殖していくんだからな」

想像の蠟燭が膨らみ高く伸び、その巨大な炎を揺らめかしていた。炎自体で生命そのものを脅かす。蠟を飲み込んでしまうほどの勢いで、成長しゆく狂炎。

人間の当然あるべき死と生のサイクルを狂わされ、体中に死なぬ塊を持ったモノ。それは一体、何なのだろうか？ その身体を操っているのは何なのだろうか？ 肉体という器の主はヒトか？ それとも出来物か？

いつの間にか、野々瀬は喋ることを止めていた。そして、無言で僕を見つめていた。

苦渋を抱えた瞳で、微かな哀れみを忍ばせて、僕を見ていた。

「それが苑華^{そのか}だよ」

「……っ」

「白星苑華。奴らチームの間では、エデンと呼ばれていた」
全身に一つ、大きく震えが走った。

——樂園って意味なの

僕の脳裏で苑華が囁く。

そんな馬鹿な、そんなはずはない。

あいつの身体が人工的な病苦に苛まれていたなんて、そんなわけがない。

確かに弱々しく繊細な印象はあった。だけど、あいつは普通に僕と話していたし、いつだって笑っていた。

「信じねえよ！　んなこと信じられるかよ！　どうせ、お前らの作り話だろうが！」

嘘に決まっている。そんなことあるわけがない。

記憶の中の苑華は、常に笑顔だった。混じりけのない純粹な笑顔で、いつも僕を圧倒していたのだ。ただの笑顔が力を持つということとを、僕は彼女に会って初めて知った。

苑華は、およそ負の感情を知らないような奴だった。だから僕はいつも彼女のことを、何の悩みもない脳天気な奴だと、そう思っていたのだ。そしてそんなところが妬ましくて、からかったりもした。そんな時だって、苑華は笑っていた。

陰謀、策略、野望……：そういったものからは、とても遠いところにいるような存在に見えていたのだ。それなのに。

「こんな趣味の悪い嘘を吐いてどうする」

内に燦る怒気を孕んで、野々瀬が言う。苛烈な瞳で以て、僕を睨みつける。

「なわた縄田君、気持ちは分かるが聞いて欲しいことはまだあるんだ」

「これ以上何を聞けって言うんだよ！」

僕の中で橙の火焰が、一つ揺らめく。

その炎で、今、目の前で喋る相手の喉を焼き潰し、この耳の鼓膜を焦がしてしまいたかった。

けれどそれは想像上のことで、現実では残酷な野々瀬のせの物語は続くのだ。

「神谷かむやが欲しかったのは永遠の命だけではない。自分が支配できる世界が欲しかった。だから苑華そのかは遺伝子操作の他に、チップを埋め込まれたんだ。でも神谷が入れたかったチップを全て備え付けることは不可能だった。先の実験で、彼女の身体はだいぶ蝕まれてしまっていたからな。だから……」

「だから今度は、研究員の娘の肉体を使った」

透徹とした声を飛ばしたのは、赤い目の少女だった。その声は決して大きくはなかったのに、何故かよく響いた。

「野薔薇のい……」

「研究員は喜んで娘を差し出したわ。自分たちの研究の成果を上げたかったし、自分の娘を実験台に使うということを誇らしく思っていた」

かつん、と赤いヒールを響かせて一歩、進み、彼女は僕との距離を詰める。

肌を冷気が掠めた気がした。皮膚が内側から撫でられるように泡立つのが、自分でも分かる。しかし、彼女が何かをした様子はなく、彼女の髪は相変わらず純白を保っている。

気付けば陶磁器のようなその顔は、すぐ近くまで迫っていた。

嵌め込まれた二つの氷の瞳が、ひたと僕を見据える。色素の薄い唇が、僅かに開いた。

「この世界では様々な種の電磁波が飛び交い、そして都市を動かしている。空間そのものを振動させ、多くの種類の波を作り、信号を送る。そして受け取った信号で、都市の機器は動作し、時に情報を送受信する。特に区域Cはそうよね」

野薔薇の声は淡々としていた。そしてそれが逆に気味が悪かった。

「神谷はこう考えたの。もしこの信号を人間自身が発し、そして受け止めることができたら、と。そうして実験台となった娘の脳にチップを埋め込み、四肢の至る所に波を自在に発生する装置をつけた。その波は電磁波とはまた性質を異にするもの。体内から自在に発することができ、かつ電磁波よりも強い力を持つもの。チームは彼らが開発したその波を E d e n D y n e——即ち、エダインと名付けたわ。そして娘はこう呼ばれた、エデン二号、と……」

エダイン——この単語を、つい最近どこかで聞いた。

——あんまり無理すんな、野薔薇。お前、エダイン使いすぎや

そうだ、あの時。野薔薇が奇妙な文字の羅列を呟いて——どうやってかは知らないが——学園側の航空機を操った時だ。

僕の中で何かが弾けた。

そう、彼女は他にも色々な不可思議をやつてのけた。僕の身体を操作し、張り巡らされたコードを破壊し、窓を瓦解させた。

尋常ではないその現象の数々。それを起こすことを可能にしたのが。

「エダイン。それを娘は確かに得た。……でもその実験にしても成功とは言い難かった。娘の黒髪は白く変色し、両目からは永遠に光が消えた。消えたのは光だけではない。彼女がそれまで知っていた音、食べ物^{オリ}の味、ものの触覚、空気の中に混じる様々な匂い、それらが全て奪われたの。彼女から五感という能力は消えた。できるのは、全身に取り付けられた探知機で、外界の情報を受信し、それを処理することだけ。それは今まで彼女が当然のように知っていた感^ク覚質の世界とは別のものだった」

彼女の白い髪が、不意に風もないのに舞い始める。そして毛先から少しずつ変化が訪れる。一点のシミもない純白から、銀のそれへと。彼女自身が、無意識に発する波力によって、その髪が染め上げられていく。

「それだけではない、波力は無限ではなかった。それを使う度に、彼女の体力は摩耗していく。それは確実に寿命を縮めていくの。それでは意味を為さない。神谷が欲しい永遠の命と力とは程遠いのだから」

野薔薇は、ふと遠くを見つめた。ここではないどこか遠くを。

でもその目つきは鋭く、はつきりと何かを睨んでいた。

今まで黙っていた雷が、溜息混じりに口を開く。

「もう分かったやろ、エデン二号機はこいつ——野薔薇のことや。

俺らは許せんかった、神谷の横暴が。そしてこれ以上、犠牲者を増やしたくなかった。……せやから苑華さんも、研究に積極的に協力する振りをして、神谷の許へいったんや。結局は返り討ちに遭うて捕らえられてしもたみたいやけどな」

「え……」

捕らえられた——？

僕は目を瞠った。

野々瀬が握り拳を作る。

「我々は苑華を助けたい。そして神谷の企てを止めたい。……だから、君に協力して欲しいんだ」

重たい沈黙の緞帳じゆんていが落ちる。

俯いた自分に注がれる視線を、僕は痛いほど感じていた。三人が答えを待っていた。

腕が震えた。唇も上手く動かすことができなかった。

ひしひしと皮膚を通して伝わる期待という名の圧力。『是』という返事を疑っていない——いや、むしろ『是』ということ強いような、威圧するようなこの空気。

今、この胸内に渦巻く感情を何と名付けたらいいのだろう。

ややあつて、僕は自分で出した回答を絞り出す。嚙れたその声が、三人の表情を強ばらせた。

「やなこつたよ……」

「な……！」

「やなこつたつて言ってるんだよ！」

自らそう言いながら、苦いものが口の中に広がる。

そうではないだろう、ともう一人の僕が、僕自身を詰る。まるで理不尽な罪悪感が、僕を責める。

だが、耐えられなかったのだ。

知りたくもないことを知らされ、頭の混乱が治まらないうちに、まだどうするか決めてもないうちに、選択を用意されるこの状況が。

「正直、俺にはあんたらの言っていることが本当か嘘かも分かんねえ。しかも、何で俺なんだよ！ 理由を聞かせろよ、理由」

三人は顔を見合わせる。それぞれの面には、複雑な表情が浮かんでいた。

何も言わない彼らに畳みかけるように、僕は怒鳴りつける。

「ほら答えられないんじゃないか！ 俺を家に帰せよ！」

家、と自分で言ってから、その『家』がないことに改めて、気付かされる。

ほらこんなにも自然に、口から飛び出てくるというのに、帰る場所は今どこにもないのだ。当然のこととして身体と心が無意識の中に記憶しているのに、その記憶の現実は今もはや跡形もなく崩れ去っている。

瞼裏に鮮烈に浮かび上がる火焰。皮膚を裂く粉塵の痛みさえ、生々しく思い起こすことができた。

急に呼吸が苦しくなる。見えない手で喉をきつく締め上げられて

いる気がする。

ひゅう、と喉の奥が鳴った。それに抗おうと喉元に手をやるうとしたとき、野々瀬^{のせ}が言葉を発した。

「ある、理由なら。君は我々に協力しなければならぬ義務があるんだ」

「義……務？」

想定外のことを言われて、僕は問い返した。

呼吸苦は完全に消失したわけではなかったが、彼女が伝えようとする何かが、喉がこれ以上絞められるのを押しとどめていた。

彼女の口から、言葉を発する前の小さなブレスが漏れる。

ところが。

「琳^{りん}」

厳しくそれを制する声が割って入る。それは野薔薇^{のばい}のものだった。

野薔薇は目を伏せ、唇を左右に引き結んでいた。

それが何を意味するのか僕には分からない。それでも野々瀬と雷^{らい}には通じるものがあつたらしい。彼らも一瞬目配せした後、それぞれに視線をあらぬ方に向けてしまった。

「……？」

僕は不審で眉を顰める。

「……くよ」

不意に白髪の少女が呟いた。その声はあまりにも密やか過ぎて聞き取ることができず、僕は口を閉じたまま、彼女の方に目を向ける。

少女は再度、言った。

「ラグナロクよ。苑華^{そのか}はあなたにそれを託したはずよ」

「え……？」

「彼女は自分が失敗したときのことを想定して、あなたに終末コードを授けた。それがラグナロク。楽園崩壊のパスワード」

「何だ……それ？ 俺はそんなの知らねえよ！」

「あんた、ほんまに覚えてへんの？」

雷が呆れたような顔をする。それが余計に腹が立った。

覚えてないのかと聞かれても、知らないものは知らないし、分らないものは分らない。

むっときたものを露骨に顔に出してしまったのか、雷が僕を見て、やれやれと言わんばかりに深く息を吐く。

「こりゃ、色々と難儀やなあ……」

そのただでさえ細い目が、更に細められる。

むかむかした。身に覚えのないことで、蔑まれたような気がして、苛々した。

「いいのよ、強制はしないから」

野薔薇が静かにその場に声を落とす。

「あなたが私達に協力したくないのなら、すぐにでも解放してあげる。でもこれだけは忠告しておくわ。……区域Cには戻らない方がいい」

「は？ 何でだよ？」

「初めに琳が言ったでしょ、あなたを助けたって。あなたの家を襲ったの、あれは誰の仕業だと思ってるの？」

「お前らがやったんじゃないのか？」

一番最初に持った疑いが、つい口をついて出た。刹那、三人の表情が険しくなった。

「だからそれも言っただろ、我々ではない、と！」

野々瀬が声を張り上げる。同時に彼女は、平手で机を叩いた。ばあん、という空気を割るような音が室内でこだまする。彼女は本気で怒っていた。続いて、低い声で、下から響かせるように言う。

「いいか、君の家を爆破させるよう指示したのは、神谷^{かむや}だ！」

またもや予想外のことを突きつけられて、僕は絶句する。野々瀬は更に続けた。

「私が碧水^{へきすい}学園を探していたのは、あれこそが神谷の実験場だったからだ。ただの学校にあんな馬鹿馬鹿しいくらい巨大な設備など必要なものか！ 学園という隠れ蓑^{みの}の許で、あいつは幾つもの人道に悖^{もと}る実験を繰り返していた！ 知っているか、あそこに通う生徒の

半数は研究チームそのものの人間か、或いは関係者の子息だ。だから苑華も野薔薇もそこに通っていた」

驚いて白髪赤目の少女に、改めて目を向ける。すると、彼女はぽつりと答えた。

「三年前まで中等科にいただけだから、会わなかったのかもね。髪も染めていたし、目も今ほど不気味な色をしてなかったから、目立つてもなかった。……もつとも、私はあなたを知っていたけれど」
己自身の容姿を『不気味』と自嘲気味に野薔薇^{のびた}は言う。その口調が穏やかであるが故に、それまで彼女が受けてきた苦痛の数々は計り知れないものがあつた。

と、そこで僕はふと一つの疑問を抱く。

^{へきすい}碧水は八年制の学校だ。十二、三歳で中等科で学び、十四歳から十九歳で卒業するまで高等科に在籍することになる。同じ敷地内にあるとはいえ、中等科と高等科は校舎も違うし、特に交流もないのでそれほど接する機会は多くはない。三年前と言えば、僕は十四で既に高等科にいたはずだから、野薔薇と顔見知りでなくても何ら不思議ではないのだが。

僕が意外に思ったのは、そちらではない。

先程も述べたように、中等科は十二、三歳の生徒が通う場所だ。そこに彼女は三年前に通っていた、と言った。だが、今の彼女の容姿は今どう見ても十一、二歳にしか見えない。

「え、だって君、今何歳……？」

啞然として問うと、野薔薇は、ああ、と何でもないことのように答える。

「チップを埋め込まれてから、成長が止まってしまったのよ。脳の障害でしようね。私が中等科までしかいらなかったのもそれが理由。色は誤魔化せても、体型は誤魔化せないものね。因みに年齢は十五」

納得すると同時に、後悔した。

ただでさえ、身体を弄られ、人が本来持つはずの色彩そのものですら変化してしまったのだ。容貌が幼いままであっても、おかしく

ない。それに、そのようなことをされたのが当然、いい記憶であるはずがない。

彼女の忌まわしい過去に繋がることを、軽々しく尋ねてしまった、己の浅はかさを悔いた。

けれど野薔薇はそんな僕を言葉で咎めることなく——だが、相変わらずの突き刺すような視線を投げかけながら、こう言った。

「とにかく、あなたがCに戻ったが最後、神谷にまた狙われるだけよ」

そんなことを吐き捨てられても、ああそうですか、と合点がいくわけもない。

仮に彼らの言っていることが正しいとして、僕が本当に神谷に狙われているとしてもだ。僕にはその理由が全く分からなかった。思い当たること一つなかった。

「何でだよ。何で俺がそんなイカれた奴に目を付けられた挙げ句、殺されなきゃいけないんだよ！　そして何でさくらや母さんまで死ななきゃいけなかったんだよ！」

忘れていた怒りが蘇る。

くるくるとよく働き、家事をこなしていた母さん。生意気なことを言った日も、本気で喧嘩した日もあった。でもいつも、僕の食事を用意してくれ、服を洗濯してくれていた。そしてそんなことが当たり前だと、そう思っていた。

そして、常に僕の後ろをくっついてきた、妹のさくら。何でも僕のことを真似し、無垢な笑顔で、いつも僕を和ませてくれていた。でも、あいつがもっと大きくなったら、きっと喧嘩とかもしたりするようになるんだろうな、と何の疑いもなくそんな未来をごく自然に描いていた。

それを一瞬でぶち壊したあの惨劇。

あれは神谷が命じたのだという。でも何故！　その理由が見当たらないのだ！

僕は唇を噛み締めた。ぷつりと痛みが走り、鉄の味が口内に広が

る。

険しかった野々瀬ののせの表情がふと和らいで、同情の色が浮かんだ。

「それは君の……」

ラグナロク

「あなたが終末コードを与えられたから」

野々瀬を遮るようにして、返したのは野薔薇だった。その声音には哀れみの響きなど微塵もなかった。ただ鋭利な刃物で切り込むような返事。

「恨むのなら、苑華を恨みなさい。呪うのなら、そんな自分の運命を呪いなさい。私達に当たり散らすのは簡単だけれど、それこそ筋違いというものよ」

彼女の言葉の刃が、容赦なく胸に深く食い込まれる。僕はその痛みでそれ以上、言葉を紡ぐことができなかった。

「私達の言うことが信じられないのなら、信じなくてもいい。ここを出ていきたいというのなら、そうすればいいわ。区域Cに帰りたいと言うのなら帰すし、怖いと思うのならCの外にそれなりの場所を用意してあげる。……後はあなたが決めることよ」

誰が吐いたのか分からない溜息が一つ、僕の傍を流れていった。

身体を逸らして首を傾ければ、遙か遠い虚空を臨むことができた。その虚空に疎らに浮かぶのは、ちらちらと瞬く星々だ。空気が濁っているのか、満点の星空、というわけにはいかない。恐らく、星の中でもより強く光るそれだけが、こうやってやっと地上にその存在を届けることができていただけなのだろう。それでも区域Cにいた頃は、防犯のための照明のせいで、星は僅かしか目にすることはできなかった。星を見たいと思えば、人為的に照明を落としたそうだった施設に行かなければならなかったのだ。その前にそもそも、ここ何年も、夜空を見上げようと思ったことすらなかった。

「多少見辛いとはいえ、どこに行っても見えることは見えるのな……」

僕は柵に寄りかかり、誰にともなくぼんやりと呟く。こんな落ちて着いた自分の声を聞くのも、何だか久しぶりな気がした。我がことながら妙なものだ。

僕が今いるのは、野々瀬達が拠点を置く建物の、外に突出するように作られた場所だった。ベランダというほど上品ではなく、至る所に謎の荷物が積み上げられ、床や手すりも油で汚れている。

それでもこうして外に面しているというだけで、不思議と気分は落ち着いていった。

じじ、と羽音のする方に目を向ければ、名前も知らない虫が、重なった窓の間に挟まったまま出られず、もがいていた。

区域Cにいたところは、窓と言えばボタン一つで壁に収納されるものであったが、ここではそういうわけにはいかないらしい。開閉は手動で、窓と窓を重ねるようにスライドさせて動かさねばならないのだ。随分、古い構造だ。

虫は透明な檻の中を、右に左に上に下に飛びながら、出口を探している。

——こんなところでも、遅しく生きている生き物ってあんのな
ぼんやりとそんなことを考える。

そよぐ風は、汚染されているのかもしれない。心なしか、肌が乾燥していくような気がした。周囲を覆う空気は、有害な砂塵が混じっているのかもしれない。気のせいかな、呼吸が普段よりも苦しい気がした。

でも、今すぐに死ぬとかいうことはなさそうだった。こという中にいたから、この外は普通の人間は生きてはいけない世界なんだと、何故かそう思い込んでいた。そんなはずはない、よくよく考えてみれば、C外で生活している人間は沢山いる。むしろ人口はC外の方が多いぐらいだ。もっとも、環境が汚染され、荒廃していることに違いないようだが。深呼吸をすると、咳き込みそうになる。

それでも、建物の中に閉じこもっているよりは、何倍もマシだった。閉塞空間にしていると、思考までが迷路を彷徨うことになる。

とにかく、気分を落ち着かせたかった。それも完全には無理な話ではあるが。

当たり前だ。別に何かをしたというわけでもないのに、ある日突然家を爆破され、それから間もなくして区域Cの外に連れ去られた。しかも、連れ去った者達は、苑華そのかを助けるために協力しろと言う。

おまけに。

「終末コードなんて知らねえよ……」
ラグナロク

僕は吐息と共に呟いた。

本当に身に覚えがなかったのだ。苑華が『エデン』という単語を口にしたのは、彼女が去る間際の一度だけだった。

僕はもう一度、溜息を吐いた。そして、数時間前のやり取りを思い出す。

あんなにも感情をぶつけたのは、あの事件以来初めてのことだった。

それまで身の回りのこと全てが、どこか現実から離れているような気がしていて、そしてこの自分自身の心も、どこか遠くから世の

中を見ているような気がして——、まるで夢の中にもいるような毎日を送っていたのだ。心が泡沫うたかたの中を浮遊しているような、そんな日々。

泣いたり喚いたりすれば、それこそあの惨劇が現実になってしまいそうで怖かった。知らず知らずのうちに逃避していたのだ。

けれど何故だろう——彼らの前で、ずっと秘めていたものを爆発させてしまった。その後の心は仄ひそいできて静かだ。それまでの嵐が嘘のように。今はただ、気持ちのいい気怠さの眠気があるだけ。

夜空には変わらず、星が煌めいている。気の遠くなるような距離の先にある、地球の上で僕がこんなにも悩んでいることなど、まるで関係ないともいうように。

ただ、儚く輝いている。

こうやって見えている星の中には、何万光年という距離に離れているものもあるという。不思議だ。今見えている光が、何万年も前のものだという。その時、人類は誕生していたのだろうか。いたとしたら、それはどんな生物だったのだろうか。

僕が生まれる遙か昔の光。

そしてもしかしたら、今現在は消滅してしまっているかもしれない光。

少し首を動かすと、今度は月が目に入った。見事なまでに完璧な円の満月が、ゆっくりと移動している。いや、実際には動いてはいないのだけれど、流れる雲のせいで、月自体が動いているように見える。虚空に浮かぶ丸い鏡は、淡い黄色の燐光を纏い、周囲を優しく照らしながら、そこに架かっていた。

静謐——。

そんな単語が浮かんだ。そして今のこの情景が、その単語にぴたりだとも思った。

「綺麗、だよなあ」

世界はこんなにも汚染されていて、僕はその中に独り途方に暮れているというのに。

何にも穢されず、孤高の美しさを誇るものがある。そういうものが、まだこの世界には存在している。

——白星^{しらほし}さんはこの世界が大好きです。だって、綺麗なもので満ち溢れているから

そういえば、あいつそんなメルヘンチックなこと言ってたっけな。疑うことを知らない、柔らかな苑華^{そのか}の微笑みが脳裏に浮かぶ。

あれはあいつの口癖だった。例えば道端に咲く花にも、美しいと賞賛の言葉を投げかけた。ただ外で遊ぶ子供達のことを清らかだと囁いた。

そこにある花は簡単に踏み潰されるかもしれないし、第一、作られた環境の中に生きるものだ。子供だって成長すれば、根性のねじ曲がった大人になるかもしれない、そう意地悪く返してやっても、全く気にしなかった。

——だって、綺麗なものは綺麗なんだもの！

彼女は一言、こう答えるだけだった。

——なあ、でも苑華、僕は分からないんだ

記憶の中の彼女に僕は問いかける。

君が何をそんなに愛していたのか、その世界が分からないんだ。

君の見ていた世界が、僕には見えないんだ。

体中を、人の手で編み出された病魔に侵されながら、それでも笑顔でいられた理由が分からないんだ。

本当に、分からないんだ。

僕にはこの世界は冷酷で、濁り淀んでいるようにしか映らない。

夜空に浮かぶ月は美しい。美しいけれど冷たく無関心で、こんなにも無力で卑小な僕を嗤^{わら}っているような気がする。

欲の果てを知らない人間は醜くしか見えない。区域Cの中で、今でも平穩を平穩のままに当然として貪っている、怠惰のままに日常を送る奴らが許せない。人の苦しみを見て見ぬ振りをし、或いは退屈しのぎのネタにしか思わない、そんな奴らが許せない。

——あれ？

そこまで考えて、僕は軽いデジャブに陥る。

これと似たようなことを、つい最近、僕は思わなかったっけ？

いや、でも違う。限りなく似ているけれど、何かが違う。でも何が？ 思い出せない。

窓に閉じこめられていた羽虫は、出口を探すことを諦めていた。

隅の方で止まり、時たま思い出したように向きを変える。でも、その場から動こうとはしない。

僕がなんとはなしにその様子を観察していると、ぎちぎちと不規則な音が聞こえてきた。それは僕の前方からだった。

逸らしていた身体を起こし、そしてその不審な音源を見る。そして自分の目を疑った。

「氷流^{ひりゅう}サン 飲ミ物ヲ 才持チ シマシタ」

ぎちぎちと音を立てながら、それはカップの載った盆を持つてくる。

見慣れた青い色をしているのではない。丸い頭もそこにはない。円錐の身体は緑色のペンキが塗られている金属でできていて、しかもところどころが剥けている。

でも、そのぎこちないけれど愛嬌のある動きは確かに見覚えのあるもので……。

「お手伝いロボット……？」

呆然と呟くと、そのロボットの後ろから剽軽な顔立ちの男と、白髪ひよつきんの少女が姿を現した。

「おう、ちゃんと動いた！ やっぱ俺天才やわー」

雷らいが自画自賛しながら、腰に手をあて、何やらうんうんと一人頷いている。

「ほれほれ、その盆の上にあるの取ってえや。その後の動きもチエツクせな」

何が何やら理解できず、僕は言われるがままにカップを取る。するとロボットは片手だけを胴体に収納し、もう片方の手と胴体で盆を挟んで回れ右をした。そしてまた、ぎちぎちと鳴きながら、引込んでいく。

「よし、完璧い！ ……何、呆れてん？ それ飲んでもええよ。毒なんか入ってへん」

僕に言っているのだと気付いて、慌てて手にしたカップに視線を落とす。謎の汚れがこびりついているそれには、薄いオレンジに色づいた液体が湛えられていて、これまた塵だかなんだか定かでない謎のものが、ぷかぷか浮いていた。

思わず顔を顰めた僕だったが、断るのも悪いような気がして、思い切ってそれを口を含む。途端に口の中を灼かれるような、苦いような辛いような衝撃が口内いっぱいに広がり、反射的に含んだものを噴射してしまう。見事な霧が視界を埋め、そしてその液体がもろに顔に降りかかった。

「おー、いい反応、いい反応」

きひひ、と邪気のある笑いを見せながら、雷は自分もカップの飲み物を飲む。

僕は顔と口を拭いながら、肩を怒らせた。

「酒なら酒って、そう言って下さいよ！」

「悪い、悪い。ま、今のあなたには、ええ気付^{わり}け薬やろ」

雷は、悪い、と言いながらもまだ、くつくと喉を震わせている。

まったく、人で遊ぶにもほどがある。

しかし、こうやってからかわれているのに、不思議と悪い気はしなかった。

雷と一緒にきた少女はといえば、相変^らわらずの無表情でカップを——こちらはジュースのようだった——口に運んでいた。僕が見ていることに気付いたのか、真紅の瞳だけを、ちらりとこちらに向けている。僕は慌てて視線を外した。

「実はあのロボット、あなたの家で拾ったんや」

雷はカップの中身を、勢いよく飲み干してから言った。

「気絶したあなたを琳^{りん}さんに任せてから、俺はあなたの家に行ったんや。何か奴らの手がかりがないか、と思うてな」

彼が奴らと指すのが、神谷の息のかかった者達のことであるのは、僕にも分かった。

僕は手渡された酒で、唇を湿す。少しずつ味わえば、ぴりぴりとした辛さが、舌に心地よかった。

「でも見事に破壊されとってなんもない。時間をかけて調べれば何か見つかったかもしれないけど、もたもたしとったら、こっちが危険やからな。……でも辛うじて、一つの回路盤を見つけてな。これは有力な情報源になるかもしれん、と期待して持ち帰ったんやけど」

そこで言葉を句切って、苦笑いをする。

「なんのことはない、ただのお手伝いロボットやったちゅーわけ。

……何となく身体を与えてみたけど、どこも不具合なさそうやな。部品でも運んでもらうことにするわ」

彼は、ははは、と白い歯を見せて笑った。

「爺さんって言うんですよ、あいつ」

「へ？」

雷は奇妙な顔をする。僕は説明した。

「正式名称G―？型給仕機っていうんです。だからGさん——爺さん」

「じいさ……」

途中まで言いかけて理解したところで、雷は急に爆笑し始めた。どうやらかなりツボに入っただけらしい。お腹を抱えて、全身を大きく揺らしている。

「爺さん、爺さんて……はっ、ひい、苦しい！」

彼は笑いすぎて目尻に涙さえ浮かべていた。

「ぶっ……くっ！　そう、爺さんって、爺さん！」

つられて僕も笑った。二人で心ゆくまで、一頻り、笑った。こんなに気持ちよく笑ったのは久しぶりだった。

「……すいませんでした」

ある程度笑いの発作が治まったところで、ぼくは小さく零す。対して、雷はまだ腹の皮を擦らせている。

「はっ、はへっ、なっ、何が」

笑い崩れながら、雷は尋ねた。

「いや、さっき……あんなに、怒鳴り散らしちゃって」

「あ、ああ……。いや、気にすんな。そんな気も分からんでもない。さっきまで笑い転げていた青年は、ふと真顔になる。」

「あんたが悪いんじゃない、分かっただけ」

「でも、雷さん……」

「雷でええ。んで、変な敬語使っなや。気色悪い」

彼はあからさまに顔を歪めてみせた。それが僕と距離を置かないためだと分かっているからこそ、僕はふっと心が安らぐのを感じることができる。

「しかし、困ったもんや。あんた、ほんまに苑華さんそのかから何も聞

いてへんの？」

僕は頷くしかない。隣で、雷が頭を掻きむしった。

何も聞いてないのは、僕の責任ではないのだろうけれど、役に立てないことで罪悪感を覚えてしまう。

「あいつ……苑華は、今、どんな状態なのか知っている……？」

んですか、の部分を飲み込んで、僕は尋ねる。雷は肩を竦めた。

「はつきり言つて、俺は知らん。苑華さんの意思を受け取ることができるのは、同じ『エデン』の野薔薇^{のばら}だけや」

そう返答して、青年は斜め下に視線を落とした。

彼の視線の先では、野薔薇がくるくると自分のカップを回していた。が、彼女はふと、その手を止める。そして、その鮮血を吸い込んだような双眸^{そうほう}で僕を見上げた。

「彼女は今、深い眠りの底にいるわ。……視たい？」

野薔薇は密やかな声で、僕に問う。

何を？ と問い返す前に、彼女は折れそうな腕を、僕の方に差し出した。

「野薔薇？」

雷が訝しげにその名前を呼ぶ。けれど、彼女はそれには反応せず、ただ僕の方を直視していた。

「手を……」

握れ、という意図を理解して、僕はその華奢な掌に右手で触れる。

刹那、電流のようなものが僕を貫いた。

視界が眩い白い光に支配されていく。

意識が抗えない吸引力でもって引きずられていく。沈んでいくのか引き上げられていくのか、潰されているのか、膨らまされているのか、分からない。

そもそも自分の肉体、というものをまるで実感できない。ただ、野薔薇に握られている右手だけが確かな感触だった。そして僕はそ

れに縋る意外の術を持たなかった。

鼓膜が震えないのに、音が聞こえる。内側から叩き込まれる、ノイズのような響き。

意識は変わらず、ぐいぐいと無理矢理に引つ張られていた。そのせいで、脳みそそのものが変形するような錯覚を覚える。

これ以上は耐えられないと思った瞬間、急に僕を引つ張る力が消えた。

途端に右手の小さな暖かい感触も消える。

野薔薇の手が離れたのが分かったとき、また別の手と触れあつたような気がした。

——氷流君？
ひりゅう

聞き逃してしまいそうなほど、ささやかな声は、しかし僕の心にはつきりと入った。

どくん、と心臓の音が高鳴る。

名を、呼ぼうとした。彼女の名を呼びたかった。

だがその前に別の空間に放り込まれる。今度は光もなければ、闇もなかった。

そこはまさに『無』としか呼びよのない場所。虚空。

寒くも暑くも、冷たくも熱くも、痛くも痒くもない。

何も感じない。

先程、伝わってきたノイズもない。何もない。

救いを求めようと、それすらも叶わない。ただ、見えない大きな圧力で押しつけられている。

人間が本当の恐怖を感じるのは、理解を超える事態に接したときだということを、僕は産まれて初めて知った。

もがこうとしても、もがく手足がない。叫ぼうとしても、叫ぶ喉がない。

封じられている……。

出口のない、零^{ゼロ}の空間。

「……い！ 戻ってこい！」

不意に頬に痛みが走り、僕は、はっと目を覚ます。気が付けば、雷^{らい}が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。

雷の向こう側に星空が見える。右肩に響く痛みからして、どうやらその方向に倒れて打ったらしかった。頭を打たなくて運が良かったと思う。

「あ……俺、今……？」

二、三度瞬きすると、雷は、ほっと肩を撫で下ろした。そして野薔薇を睨んだ。

「まったく、無茶をさせる」

「当然よ」

その割れた硝子のような声に、青年は軽く眉根を寄せた。だが、少女を諫めることなく手で自分の額を抑える。

僕は雷の力を借りて、半身を起こした。

倒れた時にカップを落としたのか、服が濡れて不快なアルコール臭を漂わせている。カップはすぐ傍らに転がっていて、その口から酒の線を描いていた。

「感じたでしょう？ あれが苑華の今いるところ」

背筋に冷水を浴びせられたような心地になったのは、きっと野薔薇の声が冷淡だったせいだけではないだろう。

苑華のいるところ。それは無の空間。自分の意志ですら無視される、押し潰されそうになる、無という圧力のある場所。

深淵の奥底に存在する、封じられた領域。

あれが……。

戦慄が走った。

「助きたいのなら、私達に協力しなさい。今はそれ以上のことは言わないわ。今はね」

野薔薇は意味深な台詞を吐く。

ちらりと、白い光が僕の目の前を横切った。閉じこめられていたはずの羽虫が、どうやってか隙間を見つけたらしく、建物内の明かりをその小さな羽に反射させながら、飛んでいった。

吹き荒ぶ風^{すさ}に砂塵が混じり、視界が濁る。おまけに、僕が今乗っている小型の甲機動車は、どういうわけか屋根と窓がないものだから、息を吸った際に、気管粘膜を砂の粒が覆い、水分が吸い取られていくのが分かった。

僕は蓋がついただけの簡単な水筒を開け、中に入った水を口に含んだ。けれど、周囲の熱気に瓶ごと温められたそれは、どろりとして気持ちが悪い。しかも、この水は金属でも舐めているような刺激を与えるのだ。

しかし、そんなものでもないよりはマシなのである。そして、この慣れない環境にいる僕が、無計画に水分補給をしていたせいで、水筒の中身はもう五分の一も残っていなかった。

周囲を見渡せば、罅割れた大地が傲然^{じょうぜん}と広がっている。ところどころに生える植物は、灰色がかった緑で、ひよろりと細長く垂れており、生きているのか死んでいるのかすら分らない。点々とある壊れかけた建物は、外から見るとただの巨大な箱のようで、一見したところ人の生活が送られている様子はないように思える。けれど、たまに薄明かりが灯っていたりするから、誰かがいることはいるのだろう。

ところが、そんな周囲の廃れた状況^{すた}をものともせず、隣からはさつきからメロディーになっっていない歌が聞こえていた。そのせいで、ますます気分が悪くなりそうになる。

「あーい、荒野がー、おーれの恋人さー、ふんふんふーん」
げんなりした僕を余所に、雷^{らい}は実に機嫌良く口ずさんでいた。この支離滅裂の歌詞と、崩壊した音程からして、恐らく自作なのだろうと予想する。

聞こえないようにそつと溜息を吐いて、背もたれに寄りかかると、甲機動車のがたがたという振動がさらに強く伝わってきた。

駄目だ、身に起こる全ての現象が、僕の疲労を蓄積させていく。ただ、乗っているだけなのに何故だろう。

時折思い出したように、赤い大地に旋風が巻き起こり、砂を攫い上げ通り過ぎていった。

気を紛らわせようと、また水筒の蓋に手をかけた僕は、けれどそれを止められた。

「駄目よ。それ以上飲んだら、材料庫に着く前に空になるわ」

何も見てないようで、しっかり見ていたらしい野薔薇^{のばら}が、淡々と言う。彼女は、甲機動車の後部に取り付けられた台車に、ちよこんと可愛らしく足を投げ出して座っていた。行儀が悪いその姿勢も、人形のように綺麗な容姿の彼女がすると、絵になるから不思議だ。もっとも、彼女が醸^{かも}し出す近寄りがたい空気のせいで、眼福^{がんぷく}というわけにはいかなかったが。

僕は緩めた蓋を、またきつく——僕の弱い意志が、開封という誘惑に負けないように——締め直した。

そして、そもそも何でこういうことになったのだろう、と考える。僕は二、三週間前のことを思い返していた。

あれから悩んだ末に、僕が出した結論はこうだった。

『やっぱり俺は、あんたらが言っていることが、嘘か本当か分からないし、はつきり言って信じる気もしない。でも、一度、被害に遭っている以上、またのこのこと区域Cに戻ることもできない。……だから、俺はあんたらが、何をしようとしているのか、あんたらの言っていることが真実かどうか、それがはつきりするまで一緒にいさせてもらう。全部明らかになってからどうするかは、またそれから決める』

そう宣言した時の、雷と野々瀬^{ののせ}の顔は思い出すだに、腹立たしい——因みに、野薔薇^{のばら}はといえば、相変わらずの能面顔だった——。

あの二人は、一瞬、啞然とした後、吹き出したのだ。挙げ句の果てには、雷がにやにやと気持ちの悪い笑みを浮かべながらこう言った。『なんや、あんた素直やないなあ！ 協力するつもりなら、そう言

えばええのに』

何でそうなるんだ。僕は、協力する、なんてことは一言も口にしていない。

その時のことを思い出して、自然と顔が慄然となる。

そういうことで、結局僕は彼らと行動を共にすることになっていった。そして今は、壊れた小型機を修理したり、新たな武器やら機器やらを作るための部品を、少し離れた部品庫と呼ばれるところに取りに行っているところだ。因みに野々瀬は残り、電子捜査機を用いて情報収集に勤しんでいる。

僕はといえば、男手が必要だから、という理由で狩り出されたのだが、野薔薇がついてきた理由が分からない。僕が助手席に乗り込むと、僅かに眉を震わせて、そのまま台車に座り込んだのだ。けれども、雷は特にそれに文句をつけるふうでもなかった。

そつえば、この二人はいつも一緒に行動しているような気がする。

成る程、それに気付きさえすれば、いくら鈍感な僕でも流石に勘付くことがあった。

——そうか

「雷つてもしかして」

声をかけると、青年は下手くそな歌を途切れさせて、「ん？」と一瞥^{いちべつ}をくれた。

「ロリコンなんだろ」

延々と横たわっている砂漠。命の気配すら薄いそこで。

「んなわけあるかあああああ！」

一人の男の絶叫がこだました。

* * *

辿り着いたその場所は、僕の通っていた碧水学園^{へきすい}の敷地ほどの広さがあつた。『倉庫』というからには、一軒家ぐらいの大きさのを漠然と想像していた僕は、だから度肝を抜かれた。

その場所には幾つかの建物があり、それぞれの建物には、異なる種の部品や材料が収納されてある。そもそも、区域Dの中に、こんな充実した——とはいえC程ではないが——施設があること自体、僕には意外だった。

目を点にさせて、周囲を見渡していると、「ほれ、呆れんな」と雷^{らい}に注意される。

ここでは彼は知り合いが多らしく、擦れ違う人と二言三言交わしたり、「冗談を言い合ったりしていた。

そして僕は、あの荒廃した地域のどこから、こんなに人が集まったのだろ、とそこにも驚愕していた。

「口、開いとるで」

指摘されて初めて、それに気付く。でも、それぐらい僕にとっては衝撃的だったのだ。

「びつくりしたやろ」

雷は含みのある笑みを馳せる。僕は頷く他なかった。

「でも、これは全部廃品や。しかもその殆どは区域Cから出た奴。

ここは物資も何もかも不足しとるから、こうやって廃品やらうち捨

てられとったもんやらを集めて、分解して置いてあるっちゅーわけ。資源が少ない地域の工夫や。いらんもんやから、なんぼ取っていったって誰も文句言わん。その代わり、自分もなんぞ部品や材料になりそうなもん見つけたら、置いていくんが、暗黙の了解や。てか、元々ここはゴミ置き場やったんやけどな」

「へえ……。でも、こういうの、こんなところに捨ててないで、どっかに売ったら、それなりに金になるんじゃない」

素朴な疑問を口にとすると、雷は笑った。

「売って、誰が買うてくれるっちゅーんじやい！」

確かに言われてみればそうだった。区域Cならいざ知らず、売買しようにも、C外では肝心な電子貨幣が存在しないといっても過言でもない。いや、ないわけではないのだろうが、それも一部の人間が持っているだけだ。

「さあて、まずはアネーちゃんの部品探すかな」

雷は大きく伸びをした。

「ずっと思ってたんだけど、航空機に名前なんてつけてんの？」

「おうよ！ 正式名称はアネモイ。風の神様の名前やで。ええ名前やろ！」

「へえ……」

大層自慢げにされてしまったが、正直退いただけだった。

けれど、雷はそんな僕の様子に全く気付いた様子はない。彼は僕に取ってきて欲しい部品をメモした小型ノートを手渡すと、また別の部品を探しに行ってしまった。そんな彼の後ろを、野薔薇のびいが長い白髪を揺らしながら、とことん着いていく。

まったく、あんな小さい女の子を連れたところで、大して役に立たないだろうに。

けれど、あの寄る辺ない後ろ姿が、別の誰かをどうしても彷彿させる。

—— 氷流君？
ひりゅう

この間、野薔薇に誘導されたときに、耳に触れた儚い声を思い出す。

しかし今となつては、夢のできごとのようにしか感じられない。あの体験は本当に現実だったのだろうか？　なにかもが遠いことのような気がする。

時と共に、あの体験は僕の中で風化されつつあった。

そもそも、僕は一年以上も苑華に会っていない。そのこと事態が僕の中で彼女という存在を、淡いものにしていた。それ故に、あの無の世界で触れ合ったのが苑華だと言われても、いまいち実感として沸かない。

だが、あの時、これまで味わったことのない恐怖を目の当たりにした、ということだけが知識として記憶されていた。それを思い返し、沈鬱な気分になる。

気を取り直して、僕は小型ノートのボタンを押した。すると、雷がメモした部品が、不器用に描かれた絵として現れた。それは先の捻れた、ビスのようなものだった。

ところが、初めてここに来た僕には、どこをどう探せばいいのか見当もつかない。恐らく連立する建物のなかから、小さな部品を集めているところにいけばいいのだろうが、それにしただって複数ある。更にそのそれぞれの倉庫は二階建てな上に、そこら中が板で仕切られ、所狭しとばかりに似たような形のものが並んでいるのだ。恐らく、区切られているのだから、別の種の品が置かれているのだろうが、素人の僕には何がどう違うのがてんで分らない。

どれくらい歩いただろうか、恐らく雷が求めているであろう部品の一郭に行き当たった。ところがそこは、縦は一番下から僕の身長を遙かに越える上まで、横は両手一杯広げてまだまだ余りあるスペースを占めているのだ。

僕はすっかり途方に暮れてしまう。第一、横はともかくとして、縦にはどう進めばいいのだろう。

考え^{あく}倦ねていると、近くにいた人が、一人がやつと入れる箱のよ
うなものに入って、レバーを倒した。すると、金属が軋む音を立て
ながら、その箱が上昇する。更に、ある程度上がったところで、右
に動いた。どうやら、あのレバーで上下左右操作できるらしかった。
よし、やるしかないか、と僕は気合いを入れる。そしてこの一帯
を眺めてみて分かったことは、区切られているのはどうもサイズ分
けのためのようだという事だ。よく見てみれば、区切っている板
の側面に、数字が刻まれている。それさえ分かれば、こっちのもの
だ。

ところで、雷^{らい}が求めていたサイズは、三・〇。一キヤゼだったろう
か。いや、二・〇。一だったような気もする。

僕はがりがり頭を掻きむしった。

「サイズも一緒にメモしてくれよ。気が利かねえなあ」

ぶつぶつ文句を垂れていると、誰かが目の前に立った気配がした。
最初は特に気にならなかったが、その気配が微動だにしないこと
に気付いて、ノートから視線を上げる。

次いで、滑らかな曲線を描く撫で肩と、それを縁取るふわふわし
た栗色の髪が、視界に映った。続いて視線を動かすと、細い首に行
き当たる。更に、その上に乗った顔を認めた瞬間、僕は目を見開い
た。

「うっそ、氷流^{ひりゅう}っ？」

僕が驚いたのと同時に、その少女が甲高い声を上げる。目を見開
いていたのは、彼女も同じだった。

続いて僕に抱きついてきたものだからたまらない。その突然の体
重を支えきれず、彼女もろとも倒れ込んでしまった。

背中を打った鈍い痛みが響いて、目から火花が散る。

だが、それ以上に僕を動揺させているのは、顔の上に乗っている

豊かな胸だ。彼女が少し身動きする度に、顔に柔らかい圧迫があた
る。正直、どう対処すればいいのか分からない。

「ねえ、重いんだけど……」

一刻も早く退いて欲しくてそう言つと、今度は頬に熱感が走つた。
少女が容赦なく僕の頬を引っぱたいたのだ。

「ちよつとお、『重い』なんて、最低ー！」

人目も気にせずに、あらん限りの声を張り上げるその面倒臭い女
は……、区域Cにいるはずの事件の被害者——音西^{ねとり}、だった。

*

*

あれから一悶着あつて、取り敢えず僕は人気のない場所を探して、
音西を引つ張つてきていた。あんなに人通りの多いところで抱きつ
かれたり、大声を上げられたりしたら、目立って仕方ない。しかも
運悪く雷や野薔薇に見つかったら、どんな勘違いされるかも分かっ
たものではない。

そこで僕が見つけたのは、建物と建物の間に作られたスペースだ
つた。狭くもなく、かといって広くもない。その上、上手い具合に
影ができていて、この夏の暑さにはそれが有り難かつた。他にもこ
こを休憩所として使う人がいるのか、鉄の板を簡単に組み立てただ
けの、長椅子まである。

僕は腰を降ろした。直射日光はあたつていなかったで、飛び上
がるほど熱くはなかったが、それでも辺りの熱気に温められていて、
太股の下がすぐに汗で湿つて心地悪い。

とはいえ、辺りに人がいなかったたので、今まで知らない人間の間
にいた僕は、初めて気を落ち着かせることができた。

音西とはいえば、近くにあつた錆びた水道で、自分のハンカチを
湿している。

帰り際、あそこで水を補給しよう、と考えながら、僕はその後ろ
姿をぼんやりと観察していた。無防備に魅せるきゅっと引き締まっ

たウエストが、異様に優美に映る。

——って何見てんだ、僕は

そしてそんな自分自身に嫌悪を覚えながら、頭を抱えた。更に、迂闊にも二人きりになる状況を作ってしまったことを後悔する。

そんな僕の小さな葛藤を知らない音酉は、蛇口を閉めると、歩み寄ってきた。

「はい、氷流、これほっぺにあてて。本当にごめんね」

彼女は濡れたハンカチを手渡す。ひんやりとした感触が、熱を持った頬に心地よい。

音酉は僕の隣に腰掛けた。

「で、何でお前がここににいるわけ？」

彼女に会ってからずっと抱いていた疑問を、投げかけてみる。

一瞬の、沈黙があった。

そして彼女の丸い瞳が、少しだけ揺れ動く。

「だって、氷流いきなりいなくなるんだもん」

「え……？」

僕が区域Cから離れるのと、音酉がここにいるのと何の繋がりがあるというのだ。

そう訝しがる合間にも、彼女の両目はみるみる潤んできて、僕は慌てる。

「へ、変な奴に攫われたって、きつ、聞いてっ」

音酉はしゃくり上げながら、手の甲で涙を拭った。

「え、あ……、おいおい！」

「あたし、し、心配でっ、心配でっ！ 夜も眠れなくてっ！ 家出してきちゃったの。氷流を捜そうと、お、思っでっ」

「はあっ？」

「無事なら無事って、連絡しなさいよね！ この馬鹿！」

今度は冷やしている方と反対の頬を、思いつきはつられた。

これで僕の顔は見事に林檎になったというわけだ。

音酉^{ねとり}はすぐに我に返り、益々目に涙を溜める。彼女のくつきりとした二重が、どんどん桃色に染まっていた。そして目の周囲を縁取る意外に整っていた睫毛が、透明な雫に浸される。

「あ、うー……、ごめん。あたし、何やってんだろ……」

「いや、もういいから、ホントに」

僕はといえば、音酉の予想外の泣き顔攻撃に、完敗していた。今まで、女の泣き顔なんて鬱陶しいだけだと思っていたのに、正直、こんなにもダメージを受けることになるとは。

いや、違う。こいつが悪いんだ。なんか、今日のこいつは妙だ。妙に素直で可愛く映る。はつきり言って、気持ちが悪い。勿論、本人に伝える気はさらさらないが。

でも……。

そう、でも、と思い直す。多分、自分の中にまだある、区域Cという故郷に対する懐かしさと未練が、そう見させるのだろう、と。

音酉は区域Cの人間で、そして僕はもうそこには戻れない人間。僕と彼女は、既に別世界を生きる人間となってしまったのだ。

帰りたい、という思いはまだある。けれど、もう戻れない。どんなに懐かしんでも、焦がれても、あの穏やかな生活に戻ることはできないのだ。

区域Cにいた頃は、自分たちが籠の鳥だと思っていた。所詮、区域Cは人間がコントロールする嘘偽りの楽園なのだと、世界そのものを批判して眺めていた。だが、確かにそのはずだったのに、もう二度と戻ることができないという立場にいざ陥ってみると、急にその世界が恋しくなる。どうしてもっと、日々を大切に生きてこなかったのだろう、と後悔の念ばかりが押し寄せてくる。嘗ての自分の斜めな考えは、区域Cの中に安心して住まうことができたからこそ抱えられたものだったのだと、それを知ってしまう。

自分でもどうしようもない寂寥しやくりやうが、心の中に吹き込んだ。

僕は、ふつと自嘲の笑みを馳せていた。

「悪かったな」

ぼつりと謝罪する。音酉が変な顔をして、上目遣いでこちらを見ていた。

「俺の家の事件に巻き込まれて、お前まで怪我させてしまつて」

そういえば、きちんと謝っていなかった。ただただ、自分の暗い思いに捕らわれているばかりで、周りが見えていなかった。今でも充分見えているとは言い難いけれど。そしてまだ、見えてこない犯人や神谷のチームに対しての恨みは、薄らぐ様子は少しもないのだけれど。

「悪かったな」

でも、それと音酉は関係ないのだ。

「いいよ」

音酉は顔を綻ひりゅばせた。

「いいよ、だつて氷流ひりゅうが悪いんじゃないんだもの」

その台詞を聞いたとき、赦された、と思った。何にか分からないけれど、心の枷が一つ外れたような気がした。

「そういえば、足、治ったんだな」

短いスカートの下に伸びる、すらりとした足に視線を落として、僕は言う。

あ、と音酉は小さく呟き、そして破顔した。

「うん、最近の医学の進歩って凄いよね！」

音酉はくるりと、勢いよく一回転してみせる。ただでさえ短いスカートが水平近くに舞い、あわやというところで僕は視線を逸らした。

彼女の軽い動きが、僕の心も軽くさせる。また一つ枷が消えた。燻くもっていたものが、浄化されていく。

「ねえ、今、氷流はどこで何してんの？」

くるだろつと覚悟していた質問が飛んできて、僕は身を固くした。

音酉が両手を自分の膝に当てて顔を下げ、僕の方を覗き込む。ふと、その瞳が翳^{かげ}った。

「何か悪いことでもしてんの？」

突然、がしゃんという大袈裟な音が周囲に鳴り渡る。

僕は驚いて、そちらの方を見やった。

どうやら運んでいた部品を誰かが落としたりしい。建物と建物の隙間から、一人の男が頭を下げながら、散らばった黄土色の棒を拾い集めて台車に乗せていた。

男が去っていつてから、僕は改めて音酉の方に顔を向ける。

「ごめん、言えないんだ」

「何で！」

音酉が声を荒げた。それでも、僕は首を振った。

「ごめん」

彼女がこの身を心配してくれて、ここまできてくれた、それだけでもう充分だった。これ以上、巻き込むわけにはいかなかった。

僕は音酉にハンカチをそつと返す。

「ごめん。……もう帰れよ。俺は大丈夫だからさ」

「そんな、嫌だよ、折角会えたのに！」

しかし、音酉はしつこく言い募る。僕はそれを振り切るように立ち上がった。そして背を向ける。

「いいからもう帰れって！」

僕はこの場からこのまま逃げるつもりだった。卑怯だというのは分かっている。けれど、それでもしなければ、彼女をこれ以上、無視し続けられる自信がなかったのだ。

「じゃあな」

そう一言だけ残して、立ち去ろうとした。けれど。

それはかなわなかった。

僕はその場で硬直することを余儀なくされていた。振り返ることも、一歩も動くこともできなかった。

何故なら、全神経を後頭部に集中させていたからだ。

そして、その後頭部には、何か固い感触があった。

僕の背筋に緊張が走る。全身が総毛立つ。筋肉という筋肉が、痛いほどに収縮する。

「嫌だよ、折角また会えたのに……」

音西ねとりの声のトーンが、不気味に下がる。

空気は既に凍り付いていた。

張りつめた空間に無数に漂う、見えざる無数の刃。それは真っ直ぐ、僕に煌めく刃先を向けていた。

殺意という名の、研ぎ澄まされた刃。

どこからともなく聞こえてくる機材の音が、遠くなる。僕と音西を取り巻く空間がだけが、隔てられていた。

「ね……折角会えたのに、ね」

くすり、と彼女の喉から酷薄な笑いが漏れた。

そして僕はそれを背中中で聞いていた。ぞわり、と背中を這い上がってくるような悪寒。

「おま……え！」

身体はこんなにも冷えているというのに、毛穴という毛穴から汗が吹き出してくる。

神経が剥き出しにされたように、背後に潜む強大な殺気を、ひりひりと感じる。

「何であの日、死んでくれなかったのよ。お陰で随分手間取っちゃったじゃない」

侮蔑を隠そうともせずさらけ出す口調は、僕の知る音西のものではなかった。

違う。

僕は今初めて、音西という女の正体を知ったのだ。

「アンタがCの外に逃げたときは焦ったわ。でも、反C組織アンガバが密かに通うというここに来れば、いつか会えるんじゃないかって思った

の。予想通りね」

「音西……」

「残念だけど、それもあたしの名前じゃないの。うふ、あたし可愛い彼女だったでしょ？　可愛い彼女だから、大好きな彼氏サンに、冥土の土産に教えてあげる。私の本名は天井あまい華蓮かれん。……じゃあね、バイバイ、彼氏サン」

歌うように口ずさみながら、華蓮と名乗ったその女は、銃——目で直接確認したわけではないが、恐らくそうだろう——を持つ手に力をこめる。僕の後頭部に当てられた銃口が、くつと角度を少しばかり変えた。

その時、僕は死というものを意識した。冷酷に迫りくるそれを覚悟した。

そして次の瞬間、辺りに一発の銃声が響き渡ったのである。

その音が響いたとき、僕は激痛と死がくるのを待ち受けた。しかし、それはいつまでたつても訪れなかった。

そろそろと瞼を開く。視界には建物の壁が映っていた。

まだ生きている……。

そのことに安堵しながらも、僕は周囲の状況を即座には把握できずにいた。

「よお、嬢ちゃん、その坊やから離れて貰おうか」

男の声が、壁と壁の狭間を反響する。泳がせた視線の先には、茶髪の男が銃を片手に佇んでいた。その口許は歪んで笑みの形を取っていたが、目は笑っていない。ただ、突き刺すように女——華蓮かれんの方を睨んでいる。

「雷！」

彼は銃を降ろさずに、僕らの方に歩み寄る。普段の飄々とした雰囲気はどこへやら、彼は今は棘を剥き出しにしている。

「こないなとこまで来るとは、女の癖に対した度胸やの。……チーム・エデンの間諜さんスパイ」

「……っ！」

華蓮は反射的に飛び退いた。彼女が押さえる片手からは、深紅が流れ落ちている。そしてその足許には、彼女が持っていたと思しき黒光りする銃が転がっていた。どうやらさっきの銃声は、雷が彼女の銃を持つ手を撃った音だったらしい。

じりじりと後ずさりしていた華蓮が、不意に腰を屈めようとする。伸ばしかけた手の先には、銃が落ちていた。けれども、そんな彼女を雷の鋭い声が打った。

「拾うなや！ 女やからて容赦はせんぞ」

華蓮はびくりと身を震わせ、しかしすぐに雷を真っ向から見据え、対峙する。その面に邪悪な笑みが広がった。

「馬鹿ね。どう足掻いたって、アンタ達はここで死ぬしかないの。常人が楽園の御使いに逆らうことが間違ってたって教えてあげる！」
華蓮は袖を捲る。細い手首には金属のバンドが巻かれていた。甲側に突出するように作られたそれは、中心部に青いものが埋め込まれている。そして彼女はそれを僕らの方に向けた。

同時に、空間が漣さざなみを起こしたような気がした。
人の可視域を超える波動が、人の可聴域を超える轟音が、その場に巻き起こる。

——まずい！

僕は本能的に危険を察知する。見ることも聴くこともできない刃が、僕らの方に襲いかかる気配を確かに感じ取っていた。

何か、強大な力が、逆らうことのできない波が、僕らに向かって迫りこようとしている。

——これが

身体が震えた。

これが波力エタインと呼ばれるものなのか。神谷達かむやが開発したという、悪魔の力なのか。

壁が軋む音を、耳が確かに拾った。

こんなものに、勝てるはずがない。こんな見えもしない、聞こえもしない渦を、対処できるはずがない。壁に罅が入る音と、辛うじて感じる事ができる圧力でしか、その存在を察知できないものを、避けることができるわけがない。

こんなわけが分からないものに！

衝撃が訪れるまで、あとどれくらいか。だが、その時間が分かったところで僕らはそれに抵抗する術を持たなかったし、また時間もなかった。

今度こそ本当に死ぬのだ、とそう思った。

が、しかし。

華蓮の放った刃——波力エタインはそのまま霧散したのである。ぶうんと空間が歪んで何事もなかったように元に戻る。

僕らは一瞬、何が起こったのか分からなかった。そしてそれは波力を発した張本人である華蓮も同じだったらしく、呆然としていた。いつの間にか、僕らと華蓮を隔てるように、野薔薇のばいが立っていた。彼女の流れる銀髪が、宙に漂って、まるで意思を持つかのように揺らめいている。鮮血の瞳は前方に――華蓮に向けられていた。

「やっぱり、アンタだったのね……」

華蓮が絞り出すように声を出す。野薔薇は何も言わなかった。

ただ、華蓮を氷の瞳で見据えている。その表情は中身を伺わせない、仮面のようなだった。

だが、静かにしているだけなのに、何故か野薔薇の圧倒的な存在感が、その場を支配していた。

華蓮は、その気迫に吞まれてたじろぐ。だが、すぐに気を持ち直して、激しく息巻いた。

「アンタが03を逃がしたのね！ そうね、アンタしか考えられないもの。……多大なる恩寵を受けた身でありながら恥知らずなチームの裏切り者が！」

その時、野薔薇の表情が豹変した。

これまで変化の乏しかった仮面が割れる。赤い瞳が大きく見開かれ、細い眉がきつく釣り上がった。桜桃の唇が、声を紡ぐ前に震える。

「だったらあなたが、化け物フリークになれば良かったのよ」

凍り付くような声が、ねっとり吐き出される。

野薔薇を中心に、ざあ、と風が巻き起こった。そしてそれは次第に激しさを増していく。

「野薔薇、やめろ！」

彼女が何をしようとしているかに気付き、雷が制止の声を飛ばす。けれどもそれも、その耳には届いていないようだった。

「所詮、あなたはあなたたちが産み出した異形には敵わない」

野薔薇の起こした波力はそのまま巨大な弾丸となって、華蓮に狙いを定める。そして次の瞬間、鼓膜が破れそうなほどの爆音が轟いた。

凄まじい圧力に、身体が宙に浮く。かと思えば、僕はそのまま地面に叩きつけられていた。野薔薇の編み出した波力の衝撃波が、こちらまで及んできたのだ。

ふらつく身体を必死に押さえて、周囲の状況を認識すべく瞬きをする。暫く霞んでいた視野が晴れたとき、そこには人の大きさほどに凹んだ壁が出現していた。僕が先程座っていたベンチは、巨人に踏み潰されでもしたかのように、見事に真つ二つに折れている。

全身が一つ震えた。恐ろしいと、純粹にそう思った。ただそれだけしか思えなかった。

野薔薇は息を乱すこともなく、爆発が起きる前と、寸分も変わぬ姿勢で立っている。だが、その表情は荒んでいた。その顔は僕に向けられているものではないのに、心を驚掴みにされそうな脅威を覚える。

恐怖を感じた。この小柄な一人の少女に。全身の血の気が引いていく気がした。

一方、華蓮は上方にある壁の突起部に、身を置いていた。遠目とはいえ、その顔面が蒼白になっていることは、容易に想像がつく。完全に免れたわけではないのかもしれないが、あの波力から逃げ切ったのは奇跡だ。その手首に巻き付けている波力発生装置を用いて咄嗟に防いだのだろうが、でもその装置自体は野薔薇の強大な力に晒されて、もう使い物にならなくなっていることだろう。

野薔薇が細い声で呟く。

「また、私から逃げるのね……姉さん」

——なん、だって？

一瞬、僕は自分の耳を疑った。だが、次に発せられた野薔薇の台詞で、聞いた内容に間違いがないことを悟る。

「姉さんは、そんなに私が妬ましかった？ 憎かった？」

僕は愕然^{がくぜん}として、女二人を見比べた。

間諜の女は答えず、足で突起台を蹴る。その瞬間、足許から眩い閃光が走った。同時に彼女の姿は消えた。

建物のその向こう側に飛んだということは分かったが、追いかける気力がなかった。たとえその気力があつたとしても、疾走のための機器を装着しているであろう彼女に、きつと追いつけはしなかっただろう。

僕は真っ白になった頭のまま、その場から動けずにいた。が、どさり、と布の固まりが落ちるような音で、はっと我に返る。

前方で野薔薇がその小さな身体を、地に横たえていた。

「野薔薇！」

雷^{らい}が慌てて駆け寄り、その華奢な身を抱き起こす。だが、彼女の両目は固く閉じられていて、その睫毛はびくりとも動く様子を見せない。

「おい、野薔薇、しっかりしいや！ 野薔薇！」

騒^{さわ}ぎをききつけて野次馬が集まりだした中で、雷の焦燥^{しょうそう}した声が一際大きく上がっていた。

*

*

憔悴^{せうすい}しきつた僕と雷、そして意識を手放した野薔薇の帰還に、野々^{のせ}瀬は言葉を失っていた。時に眉を顰^{ひそ}めたり、時に溜息を吐いたりしながら、事情を聞くと「お疲れ」と一言^{ひとこと}労ってくれて、それ以上は何も言わなかった。だから、何か嫌味や咎^{とが}めがくる心構えをしていた僕は、すっかり拍子抜けしてしまっていた。

そして現在も、野々瀬は僕を気遣っているのか、更に詳しく話を求めるでもなく、また情報収集と新しいプログラムの作成を続けて

いる。一方、雷は未だ目を覚まさない野薔薇の看病をしていた。今まで真剣に考えることはなかったが、波力エタインが著しく体力を摩耗させる、というのは本当らしい。

そして僕はといえば、特にすることもなく、建物の中を散策していた。

灰色の大きめのタイルで敷き詰められた壁は、ところどころに罅ひびが入っていて、黒い染みとその罅の間を這っている。窓のない廊下は、温められた熱気で充満していて、更に異様な黴臭かびくささが漂っていた。そのせいで、ふと、息苦しさすら感じてしまう。

こん、こん、と無機質な足音が建物内を揺れる。ふと立ち止まったのは、そこに複数の銃が入った容れ物が架かっていたからだ。

僕もこういったものを使えるようになった方がいいのかもしれない。音酉——いや、華蓮に銃を突きつけられたとき、悔しいが手も足も出なかった。雷がきてくれなかったら、と思うとぞつとする。

試しに一つ手に取ってみる。その黒い身体は、ずしりと想像以上の存在感を訴えてきた。

区域Cにいた頃は、触ったことすらなかった。絶対的な安全を保証されていたあの場所では、そんなものは必要なかったのだ。

絶対的な安全、という言葉の羅列を思い浮かべて、僕は首を振る。そんなものは幻想だった。あの区域にいて、僕の家は襲撃を受けたのだ。そして、神谷に命じられてそれを行ったのが。

「天井華蓮……」
あまい

口にするのも忌まわしい名を、声に乗せる。僕は知らず手にした銃を握りしめていた。

気が付いて然るべきだった。あの地獄にいて生き残れるのは、その者が回し者だったからに過ぎない。分かってしまえば、ごく単純なこと。

そして野々瀬達のせが言っていた通り、僕が狙われている、というのが本当だったということも分かった。

許せない。

そう思った。さもこちらに好意を寄せているかのような振りをして近づき、そして裏切る。僕だけならず、母やさくらまでも騙した。復讐してやる。

そう心に誓った。

やはりこの世界は、欺瞞きまんに満ち溢れているらしい。

僕は、ふ、と口許に嗤わらいを浮かべる。心に暗雲が立ち込めるのを止めることができない。止めようとも思わない。

そうだ、これこそが本当の世界なのだ。

この狂った歪いびつな現実こそが、本物なのだ。

そしてそんな中にも、必死で綺麗なものを見出そうとしていた、苑華そのかが哀れだった。

僕が本当に彼女から終末コードラゲナロクを授けられているのなら、必ずそれを使ってやる。授けられていなかったのなら、必ず探し出してやる。

全部、この手で終わりにしてやるのだ。

そこまで考えて、疑問が浮かんだ。

今、突然浮かんだのではない。それは前々からあった、謎だった点。特に深くそれについて、これまで考え込んだことはなかったのだけだ。

僕は手にした銃を、意味もなく手で一回転させる。

何故、苑華はこの僕に終末コード（ラグナロク）を与えたのだろう？　ただ単に仲が良かったからか？

いや、苑華は他にも友達はいた。優しくふわりとした空気に、近寄っていく人間は多かった。

彼女の考えていたことが分からない。そして今は知ることができないのだ。聞きたくても、肝心な彼女がここにはいない。そしてその意識は、深淵の深い眠りの中に封じられているのだから。苑華の微細な思念を感じ取ることができるのは、野薔薇^{のばら}だけ。

そこまで思つて、また僕は釈然としないものを覚える。

野薔薇だけ？　本当に？

疑問は更に疑問を呼び、連鎖を起こす。

僕は以前、野薔薇に手を握られた時のことを思い出していた。そう、ああやつて彼女は僕の意識を苑華のそれと同化させた。その時は、野薔薇が『エデン』であるから可能なことなのだろう、と深く考えなかったが。

論理的に考えればおかしいではないか。野薔薇と苑華が繋がってられるのは、彼女たちの持つ波力^{エタイン}の為せる技のためだ。ならば、野薔薇と僕を繋げたものは、更に苑華と僕を触れ合わせたものは何だ？

手が震えた。全身から力が抜けていくような感じがした。

第一、何故僕は碧水^{へきすい}学園に通っていたのだろう。野々瀬は言った。碧水の生徒の半数は、神谷^{かむや}のプロジェクトの関係者張本人か、或いはその子息だと。だからこそ、苑華と野薔薇、そして音西^{ねとり}という偽名を使っていた華蓮^{かれん}も、そこに在籍していた。

じゃあ、この僕はなんだ？

もつとも、野々瀬は『半数』と言った。なら、もう半数はごく一般人であるということ。そういうことなら、僕が通つていても何らおかしいことではない。

けれど、勘が強く訴えるのだ。そこで見逃すなど。引っかかりを

確かなものとして拾い上げろと。

——No.03——あなたを迎えにきたわ

——アンタが03を逃がしたのね！

二人の女の声が、同時に僕の脳内で破裂する。

途端に、僕の中を張り巡らす全身の神経が、末梢から凍っていくような気がした。

それら一連の思考は、ある一つの疑念を抱かせるのに充分なもので……。

気が遠くなる。頭の中を、重い鐘がガンガンと鳴り響いている。

僕は両手を自分の目の前に持ってきた。

この手は、確かに僕のものか？ この身体は僕が今までそうと認識していた通りのものなのか？

「あ……」

思わず漏れた呟きですら、疑いなくなってしまった。

だが、そのままどこまでも落ちていきそうになった思考は、耳に入ってきた誰かの足音で掬い^{すく}上げられる。何者かが、僕の近くまで歩み寄り、止まった。

「なあ、俺、何を信じたらいいんだろう」

揺れる声で、振り返らずに背後にいる者に問う。

息を呑む気配がする。そしてややあってから、返事がかえってきた。

「信じたくないときは、信じなくていいのよ」

何となく、後ろにいるのは雷^{らい}だろうと思っていた僕は——野々瀬は忙しくしていたし、野薔薇は倒れていたからだ——、予想外の少女の声に、はっと振り返った。

そこには白髪の少女が悄然と立っていた。

「私は雷にそう教えられた。信じられるようになるまで、ひっそりとしておけばいいと」

No.02は穏やかにそう言う。まだ本調子ではないのだろう、ただでさえ白い顔が今夜は余計青白く、衰弱の色を濃く滲ませてい

た。

僕は目を瞠って、目の前の少女を見つめる。彼女は少し眉を顰めた。

「何？」

「いや、ちよつと意外だったから」

「何が？」

「……君は俺のこと嫌いだと思ってた」

直接そう言われたことはない。だが、突き刺すような視線が、冷やかな態度が、どんな言葉よりも明確に僕にそう示していたのだ。野薔薇は微かに表情を曇らせる。

「分かっているのよ、あなたが悪いんじゃないってことぐらい、私だって。……でも消えないの」

——恨みが、憎しみが。

そんな声なき声を聞いたような気が、した。

「それと、そんなものあなたには必要ない」

何のことだろう、と考えて、すぐに僕が手に持っている銃のことを指しているのだと気付く。

野薔薇のびは続けた。

「あなたはまだ目覚めていないだけ。いずれ波力を手に入れる運命にある」

彼女のこの台詞が、僕の中の疑念を再び呼び覚ます。僕は喉を下させた。

「僕は『エデン』なのか……？」

「化け物フリーク」

野薔薇はそう訂正した。それは『エデン』よりももっと加虐な響きだった。

「私達はフリークスよ。この世ならぬモノを、存在してはならぬモノを産み出した罪は大きい。人の領域を越えた、思い上がった彼ら

に、鉄槌を下さなければならぬわ。それが私達の使命。分かる？」
語る少女の声は、冷冽としていて、その前にこうして立っている
だけで、寒気を覚える。

そして僕は悟った。僕らが同じ穴の貉むじなということを。

これ以上、神谷の犠牲者を増やさないためとか、彼らの間違った
研究を止めるため、とかそんな偽善的な理由ではなく。

野薔薇は自分をこんな身体に作り変えた奴らに対する恨みのため。
そして僕は自分の平和な日常を奪った奴らに対する憎しみのため。
戦うのだ。それは正義のためなどではない。

ただ、どす黒く渦巻く感情に起因するもの。
報復、なのだ。

その日は朝から忙しなかった。

僕は自室で寝転がって、漫画を読んでいたのだが、内容が全然頭に入ってこない。階下から、ばたばたとした物音が聞こえてくるからだ。それ以外の理由はない。

浅く溜息を吐き、部屋を出る。そして階段の上から、下を見下ろした。

——何してんの？

——何って、今日、氷流が初めて彼女連れてくるって言うから、お家のお片づけしないかね

そう言いながら、母親が機嫌よく洗濯物の山を運んでいた。少し離れたところでは爺さんが——お手伝いロボットだ——が、静かな振動をさせて掃除機をかけている。

——彼女じゃねーよ

手摺りに顎を載せて、面倒臭そうに僕は呟く。

けれども母親は特に突っ込まず、視界の隅から消えた。同時に遠くから「お菓子は何がいいかしらね」と、弾んだ声が聞こえてくる。僕はまた一つ溜息を吐いた。

まったく、何をそんなに張り切ってたんだか。

今日は苑華そのかが家に遊びにくることになっていた。僕が買った新しいゲームの話したら、珍しく彼女が興味を持ち、じゃあ週末にでも一緒に家でプレイしようか、という話になったのである。

約束をした時は軽く考えていたのだが、こうして母親が自分のことでもないのに、実に楽しそうに働いているところを目の当たりにすると、やっぱり僕みたいな年齢の男が女を家に呼ぶというのは妙なのかと思ってしまう。

——ま、苑華だからいっか

そう独り言を言って、僕は自室に戻ろうとした。その時、玄関の

チャイムが短いメロディーを奏でる。

——あ……

——はい、いらっしやい！

階段を降りようとした僕は、けれどもせつかちな母親に先を越されてしまった。

こんにちは、初めまして、ゆっくりしていつてね……そんなやり取りが玄関先で繰り返られているのが、僕のいるところにも小さく伝わってくる。僕は口許を緩めた。

それからは大変な騒ぎだった。苑華が意外にもゲームに嵌ってしまい、普段の物静かな彼女からは想像できなかった程の、賑やかな声を上げたのだ。

——あー、また負けたあ。ね、氷流君、もう一回勝負しよ？ もう一回！

僕は彼女の新たな一面を見た気がして、興味深くその様子を観察していた。

——もう何回やっても同じだって

——氷流君に勝てるようになるまで頑張る

——そんなんじゃ、日が暮れる。てか、そこ頑張るとこなの？

苑華は、むすっと膨れっ面をしてみせる。そして僕は、そんな表情も初めて見た。

彼女はコントローラーを放り出して、大きく背伸びをする。するとちょうどいいタイミングで、爺さんがジュースとケーキを運んできた。

——今日ノ　オ菓子ハ　マーブルハウス　ノ　ケーキ　ト　オレ
ンジジュース　デス

——そんなの見れば分かるっつの

僕は鼻で笑ってそれらを取る。苑華もそれに倣った。

——これが、氷流君の言ってたお爺ちゃん？

苑華が好奇心を剥き出しにして、ごくありふれた何の変哲もないお手伝いロボットを、隅から隅まで眺める。僕は頷いた。

——そ。なかなか愛嬌あるだろ

僕が、ぽんと軽くその背を押すと、爺さんはその場を去っていくべく向きを変える。

しかし、苑華はそれを引き留めた。

——あ、待ってお爺ちゃん！ 私、お爺ちゃんにプレゼント持ってきたの

少しばかりの言語を理解するロボットは、かたかたとした動きを止める。

——プレゼント？

僕が鸚鵡返しに尋ねると、苑華は勢いよく頷いた。そして指の先程の小さなチップを取り出す。

——氷流君の家にお手伝いロボットがいるって聞いて、新しい機能つけてあげようと思って。ねえ、氷流君、この子、眠らせるのどうしたらいいの？

青い円柱の胴体の下部にある、小さな凹みのその奥にあるボタンを、僕は押した。少し遅れて、爺さんの目の役割を果たすカメラの赤い光が、徐々に消えていく。それが完全に消失すると、苑華は、よしつと気合いを入れた。

——ねえ、工具セツトない？

彼女に頼まれて、一階の倉庫から赤い工具箱を持つてくる。

苑華はそこから適当な道具を物色すると、早速、爺さんの分解を始めた。

——なあ、壊すなよ

——大丈夫、大丈夫

見るからに不器用そうな彼女の行為は、不安を煽り立てるものがあったが、何だか楽しそうだったので、好きにさせておいた。壊れたら弁償してもらえば済むだけの話だ。

彼女は四苦八苦しながら、半球状の頭を外す。そうやって現れたのは詰め込まれた回路だった。けれども、思ったほどは大きくない。僕の掌二個分ぐらいの面積しかなかった。そしてそこには僕には理

解できない走行の、細い金属の線や、赤やら青やらの色を施された部品が、整列されている。苑華は暫くそれを眺めていたが、ある場所に見当をつけると、その回路を切断した。

——あ、おい、ちょっと！

——大丈夫、また付ければ済むもの

彼女は続いて自分が持つてきたチップを埋め込む。更に、小一時間程かけて、さっき自分が取り外した回路盤を上から設置した。

——よし、これで完成つと

——なあ、何入れたんだよ

爺さんに頭を被せる彼女に、僕は聞いた。彼女は、ふふふとどこか得意げに笑う。

——秘密！ そのうち分かるかもだよ

——はあ？ 何だそら

しかし、苑華^{そのか}は何も説明をしない。先程、爺さんが運んできたジューズを取り、壁にもたれかかる。どうやら、爺さんの改造は、彼女にとって肉体的にも、そして精神的にかなり重労働だったらしく、白い額に汗の粒を浮かべていた。僕は、それを見てまた不安になる。その横で苑華は、コップにささったストローをくわえた。白い筒に、薄いオレンジ色が上がっていった。

——ああ、美味し！ いいよね、こういうの

——何が？ そんなにジューズ美味しかった？

——うん、美味しかったよ。……こんな何気ないことつてさ、忘れたようでも心のどっかで覚えてるんだよね。そして、何年も何年も経ってから、懐かしくなるんだ。なんでもないことなのに、すっごいきらきらしで見えるようになるんだよ

苑華は窓の外を見る。開け放たれたそこから、生暖かい風が草いきれの匂いを混じらせて、吹き込んでいた。じーわじーわと、蝉の喧しい鳴き声が、長閑さで流れている。

苑華は立ち上がり、窓の向こう側に身を乗り出した。

——落ちるなよ

僕はからかい半分に声をかけた。

一際、風が大きく吹き、彼女の髪を舞わせる。その髪は日に透けて輝き、白皙の肌は光を照り返す。頬に乗った柔らかな産毛が、淡く発光していた。

——ねえ、氷流君^{ひりゅう}、入道雲！

不意に、苑華が明るい声を上げる。

彼女が指さした先には、見事な積乱雲が天を貫いていた。雲は、べた塗りされたような青空を背景に、黄金の縁を輝かせていた。

*

*

「あれ？」

ぱちりと目を開けて、それから僕は二、三度瞬きをする。今いる場所は、ぼんやりと薄闇に包まれていて、先程いたはずの眩い世界からは懸け離れていた。

だから頭の中には多少の混乱が生じてしまう。

「夢、か」

軽く頭を振って、夢の残滓を追いつかう。そして周囲を見渡した。目に映るのは、仄暗い中に浮かび上がる飾り気のない壁と、簡素な机だけだ。壁を切り取っただけの簡単な窓からは、深い藍色の層のが広がっている。更に遠くには、強い紅に染まった雲が筋を描いていた。

日の出が近いのだ。

僕は身を起こして硬い寝台に腰掛ける。そしてくしゃりと、前髪を掻き上げた。

とてつもない虚無感が、押し寄せてくる。

僕の今の荒れた心には、今の夢は眩しすぎた。きりきりと胃が捻れるぐらいに、鮮やかすぎた。

「馬鹿野郎……」

ここにはいない女に、恨みを投げかける。返ってくる言葉は、当然ない。

「変なものばかり残していきやがって」

忌々しげに呟いてみたけれど、返って苛立ちが増したただけだった。もうあの夢は僕には遠すぎた。そこは入ってはいけない世界だった。狂おしいほどの憧憬も、ただ空回りするばかりなのだ。

—— あんな日もあったんだよな

毎日毎日が、のんびりと過ぎていつて、これがずっと続いていくのだという無条件にそう信じていた日々。未来という言葉を考える余裕もないほどに、毎日が色んなものに溢れていて、けれど何かをしているというわけでもなく、ただ退屈なぐらいに暢気だった。

でも、そこに何かを置いてきてしまったような気がする。

だから今、こんなにも胸内が空っぽなのだ。

取り戻したくても取り戻せない。

手に入れたくても手に入れない。

これまでそうと、何の疑いもなく受け入れていた世界は、僕を拒絶した。突然、家族を殺され、挙げ句の果てには自分の命まで狙われる羽目になった。自分を慕ってくれている、と無条件に信じていた人間は、単なる裏切り者だった。

裏切り者？

僕はその言葉を胸内で反芻する。そして首を振った。

いや、違う。僕が勝手に、思い上がっていただけだ。斜めに構えていながら、あたかも世界は自分のために存在しているかのように、自惚れていたただけだ。

慢心にも程がある。現実、こんなにも冷酷だったというのに。

僕は己を嗤った。

自分が生きてきた過去は、今や遙か彼方にある。手を伸ばしても届かないのなら、背を向ければいい。

ところが、そう自分に言い聞かせようとすればするほど、逆に心は還っていくのだ。あの、蜃気楼のような思い出に。その中で、無邪気に笑う少女に。

—— なあ、教えてくれよ

僕は彼女に、胸内で問いかける。
どうしたら、あんなふうに微笑んでいられるのか。何故、いつも
あんなに楽しそうだったのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9068x/>

エデンの苑

2011年12月7日01時54分発行